一文 芸一

草の丘

第13号



2017年12月 印旛文学の会

URL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/

文芸

草の丘 第十三号 (二〇一七年十二月)

目次 草の丘 第十三号

《詩》

未熟の代償畑	《短編》	中	そよのバアバの空中サロン(その四)	ラン博士の館(第四話) 唐瀬	《連載小説》	人生は謎めいている 中	《結》
畑中康郎		中川とら	で 四	光		中川とら	
\equiv		$\frac{-}{\Xi}$		三		· —	

この前・この間(前編) いんば華子 <u>兀</u> 兀

《エッセイ》

地球環境が激変するとき

畑中康郎 五三

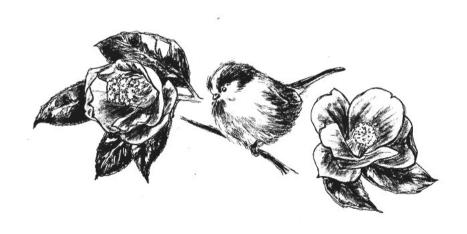
《連載小説》

宿場町と共に消ゆ (第二回)

香取 淳 五八

《カット》

高橋より



人生は謎めいている

中川とら

帽子を真深くかぶり

黒いマントに身をつつめば

悩める人の物語も始まる

三、肌寒い長雨の夕べ

傘の中に 自分をすっぽりかくし

いそいそと どこかへ急ぐ

にわかに

孤独な人生のにおいが漂う

1

一、人気のない

暗く湿った路地裏を

それだけで

下を向いて歩く

人生は さびしく謎めいて映る

<u>_</u>

北風が

ひっきりなしに吹きつける午後

四、しかし

あした 空が青く晴れわたれば

どこかで 爽快なドラマが展開したりする

歓声が湧きあがる

いかにも人生は謎めいて 楽しい



ラン博士の館 (第四話: 男性消滅GO!)

唐瀬 光

プ ロ 口 ーグ

『男は、 入学したての頃、女学園の広い森を散歩していた時、 なんのために存在するのかね?』

偶

然出会った理事長に、そう問われた。

『それは妻と子供を養うためです。子育てには長い時間 が

かかるから』

ぼくはありきたりの答えを返した。 (元は女性だが、今は性転換して男の外形になってい

ちた顔で語った。

ない。 る

争本能ゆえに、 『それがいつの間にか社会に君臨し、 毎日激しい権力争いをしている』 脳に組み込まれ

『終には核や生物兵器を使うまでになるだろう。皮肉なも 彼は憂いを帯びた表情で続ける。

トという種を滅ぼすことになろうとは』 のだ、子孫を守るために創造された男が、 逆に自分たちヒ

ため息まじりに発せられた彼の言葉が、今でもはっきり

は『男は手助けする者として、女から派生したに過ぎ

聖書の記述とは、まるっきり逆なのだ』と確信に満

耳に残ってい

ここ東京は西の端、 高尾山の麓。 濃い緑におおわれた高

一面に、 中高一貫教育を行う全寮制舞鶴女学園の校舎や

台

ンドばかりでなく、 寮棟が立ち並んでいる。 西の峰に続く山林一帯を取り込んでい 学 園 「の敷地は広く、 建物やグラウ

る。

ことはできない。 育が行われている。 リートの高い塀に囲まれ、 その広大な敷地は、 理事長の方針通り『女だけで生活する社会』を作る教 ここは一般社会から切り離された女の世 背丈の二、三倍はありそうなコンク なに人もそれを超えて侵入する

ぼく立花芯 (通称『シン』) も理事長と同じように、 身体

が ク』と言い、 当たるらしい。 は女性だが、 世間では『変な女』としか見てくれない。 く自身は、 脳の構造は男。 相手を『オマエ』『キミ』で呼ぶ。 言葉遣いも、 まるっきり自然に振る舞っているつもりだ 自分のことを『オレ』とか『ボ 世間で言うところの障害者に

> 苦しんだが、 考様式は男という生徒がかなり で皆女性。 入学してからというもの、 それにこの学園には、ぼくのように身体は女性だが、 なにせここは生徒から先生、 公立 一の中学校を卒業するまでは、 差異の対象となる男という種がいな 深い森と高い塀に隔離された、この女子校に すっかりその違和感が消えた。 警備員、 いる。 そのギャップにかなり 理事長が全国からス 事務職員に至るま 7) のだ。 思

ぼくの友人、 同学年の黒木カズや福地さぎり、 カウトして来たのだそうだ。

来医師をめざして遺伝子研究に余念がない 蘭先輩 (七島

蘭ゟ :二年生、 生物部) Ŕ 同種の資質を持 , つ仲間 なのだ。

それに、ここには女性徒同士でパートナーになる『聖婚』

という慣習がある。 (伊東葵) ぼくも一学年上の生徒会書記、 葵さん

と式を上げ『夫婦』

の間柄となった。

それ

男性消滅G ŏ!

1

土曜日の昼、 お雪のケータイが『クオー クオー』と、

鶴の鳴き声を奏でる。 から携帯電話を取り出し、着信番号を確かめて耳に当てる。 彼女はあわててスカートのポケット

お雪こと尾鈴美雪。ぼくと同じ寮室の彼女は、ぼくが所ゆき おすずみゆき

属するクラスの隣、 学園の主だった者だけに配られる校内ケータイを所持 F組の学級委員長をしている。そのた

しているのだ。

子に近寄り、ケータイから漏れて来る声に耳を傾けた。 くは急いでベッドから滑り下りると、お雪の座っている椅 彼女が片手をこちらに振って『来て』と手招きする。ぼ

(お雪ちゃん?) 電話の声は葵さんだ。

ヘシンもそこにいるの? だったら二人ですぐ来て!〉

なんだか切羽詰まっている感じ。

「今、どこにいらっしゃるのですか」

(あそこよ、あそこ!)

「あそこって?」

お雪がのんびりした口調で聞き返す。

〈ええい、じれったいわねえ。あそこと言ったら、あそこ

よ!>

ぼくはピンと来た。

「お雪『あそこ』だ。 あの西洋館。なにかあったのだ」

そばから口を挟む。

〈そうよ、ヤツらがいるの。この真っ昼間

「そりゃあ、大変だ。お雪、すぐ行こう」

かけ、寮を飛び出すと、廃園のはずれに建つ古い西洋館に ぼくとお雪は着のみ着のまま、玄関でスニーカーを突っ

向かって、森の中を走った。

を右や左に木立やレンガ塀を避けながら走り抜け、先週の 深緑の森を抜けると、荒れはてた西洋庭園に出る。 そこ

葵さんは太いカシの横枝に立って、館の方を覗っている。 見張りに使った大きなカシの木までやって来た。

から〉

の作業着 女の服装は先週の 脛 や肘、 夜、 帽子のつばなどに泥が付着して 館の様子を見に来た時と同じ 園

るところをみると、

山林や荒れ地を駆けて来たので、ところどころ蜘蛛の糸や 下白いトレ それに比べ駆けつけた二人の服装はといえば、 ーニングウエア。ぼくはいつもの黒いジャージ。 部活の途中だったのだろうか お雪は上

木の葉がくっついている。

指の割れた地下足袋ではなく、普通のスニーカーなので、 ブに足をかけて、 ンチか置きに結び目が作られており、 木の幹に結びつけ、 葵さんが腰に下げたロープの束をほどいて、一方の 葵さんの立っている木の枝に登った。 残りを下に投げる。 ぼくとお雪はそのコ ロープには 何十 端 足 セ を

登りにくいこと。

黒く変色したガラス窓に、いくつかの人影が動い に、 :つきから全員女性のようだ。 影は全部で四 ようやく葵さんの立っている一段目の太い枝にたどり着 そこから塀の上に覗いている西洋館の塔を眺 今日 は真っ昼間 顔まではわからない からとは、 今まで夜だけの行動だった V ったいどういう状況 が、 その 説めれば、 動 ている。 作、 \mathcal{O}

> 変化があっ たのだろう。

_ う く

ッとしたように顔を上げ 葵さんがアゴに手を当てて考え込んでいたが、 「これは急がないと…… やがて

も」とつぶやいた。

「なにが、まずいんです?」

聞き返しても「そんな予感がねえ……」 と曖昧、

近くでガサゴソと藪を掻き分けて近づいて来る

足音が聞こえた。

その時、

「誰か来る!」

は、 いてない。 た背の高い美人と、上は白だが下は黒 女生徒が現れた。 お雪が木の下に目をやる。すると白い道衣に黒帯を締 なんと登校用のローファー。 背の高い人は室内用の上履き。 それに二人とも靴下を履 い袴をはい 小柄な方 た二人の 8

あっ、これ」と自分の足元に目を移して そのちぐはぐな姿に目を向けていると、背の高 胸 に しかたがなかったのさ」と男性的なトーンで答えた。 『鶴 拳 と刺 繡の入った空手衣に身を包んだその人 「葵が急がせるか い人が「あ

は、 生徒会長の高城智世。彼女は生徒会の仕事をこなすか

るから、 学園ナンバーワン。 たわら、 学内に彼女に対抗する者はいない。先生だってこ 空手部の主将も兼務している。 おまけに美貌もナンバーワンときてい 知力、 戦力ともに

の人に一目置いている。

ミ』とか男言葉を使うのには、 ってカッコよさを感じる。 アテナ女神のような美しい姿形なのに『ボク』とか『キ 違和感を通り越して、 かえ

もう一人の愛くるしい頬をしたタヌキ顔の人は、 副会長

の一ツ葉美里。 体格は小柄だが武道はめっぽう強く、 こち

る。 らは合気道の二段。 いつも生徒会長の智世様とペアを組み、 道衣の胸に 『舞拳』 の刺繡を入れてい その呼吸は実

にぴったり合っている。

「キミたち、そんな所でなにをしている?」

智世様が腕組みをして、 木の枝にへばりついている三人

を見上げる。

葵さんは「しっ!」と唇に指を立てた。それから小声で

二人に告げる。

「練習中に呼び出して悪かったね。とにかく、ここまで上

がって来て」

の軽い美里様がロー 二人ともぼくらの行動に興味津々といった様子。 プを握って、 するすると猿のように まず身

って来る。

飛び上がるのかと思いきや、やっぱりロープを伝って上が 次に智世様。空手の学内達人だから、そのまま地面 から

って来た。

わむ。 った。小柄なお雪も、 同じ枝に女子高生が五人も乗ると、太い枝もさすがにた それに窮屈なので、ぼくは、さらに一段高い ぼくの隣に上がって来る。 枝に

そこから五人そろって塔の方に目を向ける。

「う~ん」

「あれは……」

下の枝では智世様と美里様、 それに葵さんの生徒会三役

が顔を近づけてヒソヒソと話している。

小柄で坊主のような頭は……あの子 いか つい影は、

「背が高くて男のように

たぶん……」

髪をポニーテールみたいに束ねているのは……アイツ」

女たちは、 0) 中にいるのが誰なのか、 ほぼ見当をつ

けているようだ。

わからないのは、 あ 0) 中 肉中背の 影。 どうも動きが大人

びているというか、 女子高生らしくないわね」

葵さんが二人に同意を求める。

「それに、あの人、 白いコートみたいなものを着ていると

思わない? 秋になったとはいえ、まだ残暑が厳しいのに」

先々月、夏休みに入ったばかりの頃、一人でこの館を見 葵さんの「白いコート」という言葉でピンと来た。

に来た。 その時、 偶然にも校医の切原浜美先生 (通 : 称 ハ

ちゃん) がこの辺りに倒れているのを見つけ

ため睡眠不足に陥 彼女は前夜、 世田谷の舞鶴女子大の附属病院で、 学園に戻って来たとたん草の上に倒 夜勤 \mathcal{O}

り、

れて、 そのまま眠ってしまったと言うのだが、ここは先生

持たず、 \mathcal{O} それに外出から帰ったばかりにしては、バッグもなにも 住んでい あちこちに埃 る寮とは正反対の \mathcal{O} うい 場所なのだ。 た診察用の白衣を着て、 足先

には簡易なサンダルを突っかけたままだった。

(まさか、ハマちゃん……?)

「こうしていてもしかたがない わ。乗り込んでみましょう」

葵さんがみんなを見回す。

「この近くに、 「あそこにか。 あの館に抜ける穴があるわ。 学園の外だぞ」 そこから行き

ましょう」

「えっ、あの狭い穴を通るのですか」

ぼくは、突入する時には学園から出て、 表から館の中に

入るのだとばかり思っていた。

タガタ。ちょっとさわっただけで音がするのよ。 「昼間に外から攻めると、見つけられるわ。 あ 0 こっそり 建物

忍び込むのはとても無理」

葵さんは 「無理、 無理」と手を横に振 る。

「そうよね。 乗り込むなら、そっと近づいて、 ワッと驚か

すのがベストね

美里様が同意する。

け穴というやつを見たいし」 「……だな。 入るなら地下からの方が ボクもその抜

は ガ

智世様 ぼくらは木から下りると、葵さんを先頭に下草を踏みな も同意したので、直ちに決行することになった。

から、 穴の入口に向かった。

2

分けて先週見つけた抜け穴の入口を探す。 いトゲのついたヒイラギナンテンの株。 その藪を掻き

あったわ」

さえながら、その下にあるコンクリートの丸い板を指差す。 「どれどれ」 先に進んでいたお雪が、入口をおおっている茎を足で押

智世様と美里様が興味深そうに覗く。

マンホールの蓋みたいだな」

智世様が表についている取っ手をつかんで引っ張る。

<u>.</u>!

った。それを横にずらすと、 それでも彼女が腰を入れて思い切り引くと、蓋が持ち上 丸い穴が現れる。

の直径は狭く、 人ひとりがやっと入れるくらいだ。

> っていてくれない。 「わたしが先に行くわ。 誰か来たらケータイで知らせて」 お雪ちゃんはこの辺に隠れて見張

お雪が不満そうに頬をふくらます。

「ええつ、あたし一緒に行けないのお?

やだぁー

る ? と同じ罰が来る。共同正犯よ、 といっても、重要な仕事よ。刑法では、見張り役も実行犯 われないわね。こういう人は見張りが適任。あら、 はここに残っていても、 のよ。激しい戦いになるわ。その時、 「よく聞いて、これから私たち、 あなたには武道の心得がないでしょう。戦闘には加 立派に私たちと同じ役目を果たし 共同正犯。だから、あなた アイツらを退治しに行く お雪ちゃん、どうす

たことになるの」 葵さんはどこで覚えたのか、 刑法の規則などを持ち出し

かす。 て、見張りも重要な役目だと、 戦闘力のないお雪を突入からはずすつもりだ。 噛んで含めるように言

バ ッグから懐中電灯を出 お雪を一人残して、 四人が穴の中に入る。葵さんが腰

うな広さだ。 穴の底は四角形の空洞になっており、 壁の一つにはアーチ状の穴が開いて、 人が数人立てるよ

して点ける。

のすべてが切石を積み重ねたものだ。に続いている。そのアーチ型のトンネル、四角の空洞、

そ

すこい!

たしなめる。
美里様が感嘆の声を上げるのを、葵さんが「しっ!」と

中電灯を片手に、 次にぼ おさげの髪が二本伸びて、 大きな声はダメ。 女は作業用のキ くと美里 洞窟の中に入って行く。 様が続き、 穴の中って、 ヤップ帽をしっかり 腰のあたりで揺れている。 智世 案外音が響くのよ」 |様がしんがりを務める。 か 帽子の下から長 むり直して、 懐

泥が積り、歩くたびに靴底が地面にめり込む。 人ひとりが背を屈めてやっと通れるような洞窟。下には

穴の中を進んだ。られることはなかった。ぼくらは声も立てず、ただ黙々とられることはなかった。ぼくらは声も立てず、ただ黙々とそれでも館に通う者が頻繁に踏み固めたとみえ、足をと

灯の明かりで突き当たりの壁を照らす。やく。彼女はみんなに『止まれ』の合図を送ると、懐中電やがて先頭を行く葵さんが立ち止り「着いたよ」とささ

ると、どうやら扉らしい。ふさがっていた。端の方に取っ手がついているところをみいかりの先には、館の玄関と同じような青銅の壁が立ち

音がして、あわてて手を止める。 葵さんが取っ手をつかんで押す。とたんにギイッという

押すので、大きな音はしなかった。はなんの物音もせず、気づかれた様子はなかった。相変わらず金はなんの物音もせず、気づかれた様子はなかった。

ながら、扉を抜けて、その部屋に入って行く。空間が広がっていた。みんなは音を立てないように注意しやがて扉が大きく開き、その向こうには地下室のような

か。 中電 でいえば二十畳、 リートで造られた、 そこはまさに地下室。 上灯の明 部 屋 \mathcal{O} かりを回してみると、 所 々に分厚いコンクリ いや三十畳くら 実に陰気臭い 床から天井までむき出し 部 1 部屋だった。 V 屋 あるのではない 1 \mathcal{O} は はかなり 柱が立ち、 広く、 葵さんが懐 のコ 上 だろう \mathcal{O} 建

物を支えてい

一ここは物置

んに葵さんが「しっ!」と唇に指を立てる。 すぐ後ろをついて来た美里様がボソッとつぶやく。 とた

部屋の中には崩 れかけた木箱や、 昔の古いミシン、 壊れ

た小児用の自転車などが所狭しと放置してある。 その足の踏み場もない床にも、 所々ゴミの類いが片側に

寄せられ、狭い道ができている。その曲がりくねった道に、 人の足跡が幾重にもついていた。

ぼくらは気づかれないように注意しながら、一列になっ その足跡をたどって行く。

あった。そこを静かに登って行くと、 やがて地下室の奥に、上に通じるコンクリートの階段が 暗い場所に慣れていたため、 窓から差し込む光がまぶ 急に明るい 部屋に出

忍んで行く。

_ | | 階よ |

なるほど、 葵さんが電灯の明りを消しながら、小さな声でつぶやく。 ここにある埃まみれの家具や調度品は、 二週 カュ

葵さんと二人で覗いた光景と同じものだ。

あの時

ら少しも変わってない。

し違う。あ 点在している。それらの足跡は ただ外から眺めるのと、 の時には気づかなかった足跡が、 部 屋 部 の中に入って見るのとは 屋 生の西側 にある木製 家具の 隙間に

ド

小

アに向かって伸びていた。 一列になって、ダンボールや木箱の間を縫いなが

ドアの方に向かう。

突然

〈ガタン!〉と小さな音がした。

振り向くと、

里

身を潜めていたが、ドアの向こうから出て来る者はなく、 気づかれた様子はない。一行はまたそろそろとドアの方へ 裾が、無造作に積み上げてある置物に引っかかったらしい。 様が申し訳なさそうに身を縮めている。 四人が一様に首をすくめて縮こまる。 そのまましばらく どうやら長い袴の

井が丸く縁取られているところを見ると、 い壁をらせん状に巻いて、上の階に消えている。二階の ド アを開けると、そこには、 上へ続く階段があった。 館の 西 [側に 天

てい ーツらは る塔の内部に入ったらしい。 匹 五階にいたから、 この上には ない

·はず。

葵さんが身振り手振り、ささやくような声でみんなに指でも偶然、鉢合わせということがあるから、気をつけてね」

一歩、一歩慎重に登り、天井の穴に首を突っ込んで、左右それから、彼女はまず一人で、今にも崩れそうな階段を

示する

を見回しながら、身体ごと上の階に消えた。

い、こい』と手招きする。そこで残りの三人が注意深く、しばらく見ていると、穴から葵さんの片手が覗いて『こ

らせん階段を登って行く。

チやハンマーなどを入れた道具箱。テーブルの上には電子った。大きな物では電動モーターに冷蔵庫。それにカナヅ塔の二階に出てみると、そこには雑多な器具が置いてあ

レンジ。それに大小の木箱。

り整然と並んでいる。それに何に使うのか注射器が数本。小物ではガラス瓶が十数本に鍋、皿、茶碗などが、かな

い水槽の底で、こそこそ動きまわっているネズミがいる。「キーィ、キーィ」と泣く声に部屋の隅に目を移すと、狭

なにかの実験に使うのだろうか。

三階も同じようなものが並んでいたが、ここには机と椅だけカクラ駅に使じんださいが

った。誰かが使っているのか、液晶のデスプレイが開いた子があって、その上にはノート型パソコンが一台置いてあ

ままだ。

「おい!」

天井から低い声が降って来て、皆、ビクンと身を縮めた。

(見つかったか……)

だが、すぐ次の声が聞こえた。

「はい、ハクシ」

女のような高い声が答える。

も人ひとりが通れるくらいの入口があって、声はその穴か声は上の階に続く階段の天井付近から聞こえる。そこに

らもれて来るようだ。

「ウイルスは溜まったか

--はい、このフラスコいっぱ

「そうか、それは上々」

うれしそうな高い声。

(あの声は……)

ぼくらは驚いて顔を見合わせた。

葵さんを含む生徒会の三人は(やっぱり……)

といった

必死でこらえた。 顔をしたが、ぼくは驚愕して、今にも叫びそうになるのを、

やがて世界中に広がり、それを吸った男たちからY染色体非常に軽いので、これを高尾山の頂上から風に乗せれば、

なにかに憑かれたような甲高い声が響く。

が消える。次世代に男という種は産まれないのだ」

さらに別の靴音がして、何人かがその上の階から下りて

来る気配がした。

若い女の声。

「完成したって?」

「どれ、どれ」

別の低く太い声。

った女史と、ぼくの仲間で、ボクサーでもなれそうな大柄・いずれもよく知った声だ。なにせ、ぼくの『主治医』だ

なオトコ(?)だから。

(やっぱり……)

そうではないかと薄々感じていたが、ここに来てようや

心の底にうれしい気持ちがわき上がったが、同時に(そ(この世から男を消す……あの人の夢が実現するんだ)

れでいいのか)という疑問も膨らんで来た。

生殖で人類が存続できるとしても、そこは女だけの世界。なにせこの世から男という種が消滅すれば、たとえ単為

生活様式は想像もできない程大きく変わる。

るう。『国』という組織も必要なく、人類は多くのグループろう。『国』という組織も必要なく、人類は多くのグループに分かれる。小さなもめごとは残るだろうが、部族が滅びに分かれる。小さなもめごとは残るだろうが、部族が滅びれて来た科学技術の発達は緩慢になり、現代様式の機械文机で来た科学技術の発達は緩慢になり、現代様式の機械文制は衰える。人類(女たち)はただ、その日、その日の生活を楽しみながら、以後何十万年も平和な社会を続けて行活を楽しみながら、以後何十万年も平和な社会を続けて行るようなである。

密造の現場にでも踏み込むような、険しい顔をしている。だが、ここにいる三人はそう思ってないようで、毒ガスきて滅びるかわからない現代より、どれだけ幸せなことか)(まあそれでもいいか。いや、その方が、いつ核戦争が起

りしめ、今にも上の階に突入しそうな勢いを示している。 葵さんなんか目を吊り上げ、懐中電灯を棍棒代わりに握

〈さあ、行くわよ!〉

彼女が唇だけで、みんなをうながす。

様は両腕を上げて組手の構え。皆やる気満々の様子。ぼく智世様はこぶしを固めて腕を引き、戦いのポーズ。美里

も、彼女らの勢いに乗せられてついて行く。

を突き出す。さあ、いよいよ『敵』とご対面か。 葵さんが石段をそっと登り、天井に開いている穴から首

3

だが騒ぎは起きない。会三役が、上の階に続いている四角の穴に消えて行った。階段を登って行く。葵さんに続いて智世様、美里様。生徒みんなは音を立てないよう足元に注意しながら、らせん

なにかを熱心に見つめている。部屋の隅に置いてある机の前に、若い女が四人集まって、部屋の隅に置いてある机の前に、若い女が四人集まって、どうしたのだろうと、ぼくが穴から首を出してみると、

折り曲げるようにして、覗き込んでいる上下青いジャージハマちゃんこと校医の切原先生。その後ろから長い長身を輩。その横に、白い診察衣を膝下まで垂らした蘭先輩の姉、思った通り、そこにいる人物は、まず夏用のセーラー服

のオトコ(?)は黒木カズ。

の短い福地さぎり。フラスコに片手を添えているのが、小柄で坊主のように髪オ製の椅子に腰かけて、机の上に置かれた比較的大きな

いていた。ラッパのようなその口には、しっかりとコルフラスコの中には、もやもやした煙のようなものが渦

の栓がねじ込まれている。

らい。こぶいこうスコに注目している。 ぼくらが後皆、一心に机上のフラスコに注目している。 ぼくらが後

ろから近づいても気づかない。

「これで世界は変わる。今とは別の、新しい

人類

感極まったの誕生だ!」

蘭先輩は小作りの頬を真っ赤に染めながら、

そこに、ややハスキーなもう一つの声が割って入る。ように叫ぶ。ほかの三人も同調するようにうなずく。

「ほう、どんな人類なのだね?」

「どんなって、 お前、 さんざん議論したくせに、 今さらな

にを言ってるんだ」

美人が立っていた。 蘭先輩が「バカか」と振り返る。 学 園 [の誰もが知っているその人。 と、そこには背の 高 VI

智世!」

先輩はカエルのように股を開いて、一メートルは跳び上

がった。

な、 なんで、 お前がここに? それに葵や美里。 シンも

緒か。な、なにしに来た?」

先輩ばかりか、カズやさぎり、 さぎりはフラスコの瓶をしっ ハマ先生も一斉に後ずさ かり胸に抱えていた。

なにやってるの?」 「『なにしに来た』はないわね。そっちこそ、こんな所で、

葵さんが前に進み出て智世様と並ぶ。 その横に両手を前

に構えた美里様が展開する。

に圧巻。 武道の学内達人でもある生徒会三役の居並ぶ姿はまさ さすがに蘭 先輩始め、 男並の体格を持つ黒木カズ

もう観念するのね。 Y染色体を破壊して男を消滅

もジリジリと窓際まで後退する。

させる? そんなウイル スがホントにあ んたたちに作 れた

の ? 怪しいわねえ」

たが、敏捷な彼(?)は身をすくめてその攻撃から逃れた。 「こ、これは、 葵さんは腕を伸ばしてさぎりからフラスコを奪おうとし ラン博士がその天才頭脳を絞りぬいて発明

したものだ。誰 が渡すものか!」

ラスコを抱きしめる。 さぎりが日焼けした顔をさらに真っ赤にして、必死でフ 彼 (?) は、 いつから蘭先輩の信奉

者になっていたのだろう。

が迷惑する。それに、学校の許可なく校外に出たのは校則 かなんだか知らんが、そんなものを撒き散らされては 違反。勝手に他人の家に入り込んだのも、 「そこまでだ、キミたち、もう観念しなさい。ウイルスだ 立派な住居侵入 世間

罪。 とても許せな いね

生徒会長の迫力に押されて、さぎりがアワアワと口から 上背のある智世様が目尻を上げ、腕組みしてねめ つける。

泡を吹きこぼす。

この偉大な計画 「なにが『許 せない ね 校則違反もなにもあったもんかい。や だ。 ヒトの 種を変えようという、

滅させればいい。 \mathcal{O} \mathcal{O} 和 か。 は見え見え。 な社会を作ろうっ だが、そんな社会ができたって、 たち! それならいっそ、男とい それが、 闘 争心 てのが、この学園 の強い この研究だ」 男を排除 \mathcal{O} う種を世界から消 男たちが妨害する 教育方針じゃ して、 女だけ ねえ \mathcal{O} 亚

蘭先輩は生徒会役員たちを前に、堂々と自説を展開する。

それは違うわ

「この世界に男と女がいるのは、種の存続のため、そうす葵さんが小柄な先輩を見おろしながら反論する。

しているというじゃない。百万年後には消えてなくなるとば自然に淘汰されるわよ。現にY染色体は、どんどん劣化

る必要があったからでしょう。

もし、

男が進化の害になれ

いい。人間が勝手に変えるのはよくないわ」か。……だから、進化のことは大自然の摂理に任せるのが

葵さんの持論『自然のことは自然に』が出た。

が消えて欲しいんだ!」

百万年も待てるもんか。

おれは今すぐこの世から男たち

肩を窓に激しくぶつけた。腐食して崩れかかっていた窓枠蘭先輩は言うや否や、さぎりからフラスコを奪い取ると、

先輩はフラスコを抱えたまま窓から飛び出し、三階はあっさり外れ、すぐ下の屋根に落ちて砕け散った。

の屋

に着地する。そこから背丈ほどの雑草を掻き分けながら、から生え上がっている太い蔦につかまるや、するすると庭根に立つ。そこから軒先に向かって滑るように下り、地面

蘭が逃げた!」

「追うのよ!」

庭を囲むレンガ塀に

走り、

塀

 \mathcal{O}

割れ

目

から外に走り出

ちの後から懸命について行く。すや、レンガ塀の崩れた所から外に走った。ぼくも彼女た生徒会の三人は塔のらせん階段を駆け下り、庭に飛び出

4

た道 年 ており、 -足ら 館 方は学 が 0 ずの ·麓の 敷地を走り出ると、 その道がどこに繋がってい 園 ぼくには 街まで続い の正門前に通じる道。 わからな ている。 細い もう片方は 道が二つに分かれ そこに出 るの か、 近くの ここに来て半 れば舗装され 森に消え ていた。

でも、葵さん始め生徒会の三人は、 迷うことなく森に向

かう細道に入って行く。

「どこに行くんですかぁ

前を走る三人に声をかける。

「高尾山よ、高尾山

すぐ前を走っている小柄な美里様が答える。

高尾山?」

「蘭は、フラスコの中身を高尾山の頂上から風に乗せるっ

て、言ってたじゃない」

四人は一列になって、森の中の細い道を走った。

うだ。でも道の上に土を蹴った痕がわずかに残っているか 蘭先輩の姿は見えない。もうかなり離されてしまったよ 分かれ道に来ても、それをたどって後を追うことがで

深い緑の森を抜けると、そこはケーブルカーの発着駅だ

った。 かなり急勾配の軌道を斜めに傾い た車体が上り下り

している。

駅に着いてみると、今しも一台の車両が発車するところ

だった。その中に蘭先輩らしき少女の姿が見える。

「あれに乗るのよ!」

葵さんが叫んで、四人が改札口に殺到する。

ところが、入口を通り抜けようとしたところで「おい、

おい! 君たち!」と駅員に止められた。

「割り込みはダメだよ。並んで、並んで! それに切符は

持ってるの?」

忘れてた。切符なしで乗り込もうとしたのだ。

まごまごしていると、ケーブルカーのドアが閉まり、 車

顔がこちらを見ている。 両が山上めがけて動き出した。後方の窓から蘭先輩の丸い 彼女は口から赤い舌を出して『ア

カンベー』をしていた。

「次は七分後よ。それに乗ればなんとか追いつけるわ

葵さんが切符売り場に向かおうとするのを、 智世様が が ıŀ.

めた。

「あれを見ろ!」

ちらを睨んでいた。「後ろに並べ!」と叫んでいる人もいる。 そこには、何十人、いや何百人もの登山客が並んで、こ

改札口には、

四角い紙の札が立ててあり、そこには『三

17

十分待ち』と書かれてあった。

「リフトがあるわ。二人しか乗れないけど」

「リフトに乗るって? あそこに並ぶの か

葵さんがもう一つの改札口の方に目を向ける。

智世様がその乗り場に並んでいる人の列を指差す。

「うああっ!」

ぼくは悲鳴を上げた。 その列の長いこと。 そこには 五

十分待ち』と書いてあった。

「こうなったら、走るぞ!」

智世様が率先して、ケーブルカーの横に並行して造られ

ている脇道に入り込む。

おおっ!」

美里様がこぶしを振り上げて続く。葵さんも走り出す。

「まさか、この山に走って登るのですかぁ

ぼくはあきれ顔で彼女の背中に声をかける。

あのケーブルカーは、 山の中腹までしか行かないのよ。

そこから頂上までは徒歩。 それなら、こちらも直接山 預に

出る道を行こう」

1世様が走る。 ほ カ 0) みんなも続く。 ぼくも、 げんなり

> した顔 道幅も車が一台通れるくらい広かった。 でついて行く。だが、 その道はコンクリー

(なあんだ、楽じゃん)

そう思ったのも束の間。 舗装道路はすぐに終

わ ŋ

後は

細い砂利道が、 沢の上を曲がりくねって続いている。

削ったギザギザの跡が邪魔して、 走りにくいこと。

しかも、その登山道は所構わず突き出た木の根や、

石を

山道を駆けること十数分。次第に足が重く、息が切れる。

咽から「ハア、ハア」とあえぐような声が出

るなんて、とても体力の続くものではない。それに、この いくら十代の若い身体とはいえ、この急勾配を駆け 上が

山は都心から近いだけあって、登山客の多いこと。子

れの家族なんかが前を塞ぎ、追い越すのに苦労する。 「すみません、通してください。 急いでいますので」

と声をかけながらそばを走り抜くのだが、みんな迷惑そ

うな顔をして振り返る。

「おや、筋トレ かい。 若い子はい 1 ねえ。 元気で」

と励まされたりした。 老人会の一行から声をかけら 途中、 滝のある所で小休憩し、なん れたり。「ガンバレ若者よ」

限界を超え、 とか頂上付近に着いた時には、みんなもう気力体力ともに 道の端に倒れ込んでしまった。葵さんのかむ

っていた作業帽 は風に飛ばされたのか、いつの間にか無く

なっていた。

岩だらけの狭い場所を想像していたが、展望台には大人や だが、このすぐ上が高尾山の頂上。山頂というからには、

遊園地にでも来たような感じだ。 子供がひしめき、なんと売店まであるではないか。 まるで

蘭は?」

そこに葵さんの声がして、 あわてて周囲を見回すが、 人

が多くてよくわからない。

「まさか、もう来てしまった?」

り抜けながら、夏用セーラー服に身を包んだ一人の少女が 立ち上がって広場を探す。すると、行きかう人の間をす

走って行った。胸にはフラスコの瓶をしっかり抱えている。

いたよ!」

「いた!」

「フラスコを持ってるわ

違いない。 蘭よ!」

> 四人が一斉に追う。 だが、 人混みが邪魔して一直線 に走

れない。

光客をよけながら、 それは前を行く蘭先輩も同じだったとみえ、 展望台の方に走っている。 それをぼ 右に左に

たち四人が追う。 やがて、もうすぐ追いつくというところで、彼女は展望

持っているフラスコを、崖の縁に取り

台にたどり着いた。

付けてある落下止めの杭に振り下ろそうとする。

「やめなさい蘭!」

葵さんが叫ぶ。

だが、先輩はその声が耳に入らない

カュ

のように、

瓶 を鉄

の杭に激しく叩きつけた。

「きゃーっ」

そばにいた女性客が悲鳴を上げる。

ものは、麓から吹き上げて来る強い風に乗って、空中に拡 フラスコは粉々に砕け、 中に入っているウイルスらしき

散して行った。

「しまったぁ!」

もうダメ!」

お、 終わった。 人類が変わるう」

みんな口々に声を上げ、 には蘭先輩の哄笑が、高尾山の頂上に響き渡っていた。 へなへなと地面に倒れ込む。

ピロ]

待合室のソファー には、 赤子を抱いた母親らしき人が何

人も座っていた。

あれ、男の子ですよね

のように髪を後ろに束ねた小柄な女生徒に尋ねる。 ぼくは、近くの赤ちゃんを指差しながら、ポニーテール

「わからんぞ、青い服を着ているだけかも知れんし……」

彼女は自信なさそうな口調で、男のようにぶっきらぼう

に言い返す。

あれは男の子よ。同じような服の子は、 「女の子に、わざわざ男の服を着せる親はいないでしょう。 あちこちいっぱい

るじゃない」

二本にまとめた長いおさげの髪を腰まで垂らした女子高 自信たつぷりに指摘する。

続けている。

「そうですよ、 先輩。 フラスコのあ れは煙のようなもの。

ウイルスなんてなかったんです」

ツインテールの子がダメを押すように言い添える。

「しかし……そんなはずは……」

「あたり前よ。蘭に人類の進化を変えるような大発明がで 髪を侍のように束ねた生徒は、まだ諦めきれない 、様子。

きる訳、ないじゃない」

「なんだあ、おれの作ったものが、ただの煙だとう!」

あ、 ぼくは、顔を赤らめてがなり立てようとする先輩を「ま まあ」と押さえる。

ですか。それと赤ん坊の男女比率とか。今日は偉い 科の先生に会えるんだから、はっきり結論が出るでしょう_ 「男の子か、女の子か、先生に聞いてみればいいじゃない ぼくの仲裁に先輩は不承不承うなずく。

患者を追い返す は休診なのだが『今日は 世 田 谷の舞鶴女子大付属病院、 訳にもいかず、 もう終わりだから』 毎週、 産婦人科。 三時過ぎまで診察を

土曜 と待ち

日

う続ける ロの午後

その待合室に、夏用セーラー服に身を包んだ、ぼくら生

徒会の主要メンバー四人が並んでいる。

がやって来た。年が過ぎた。新しい学年も夏休みが明け、あの時と同じ秋年が過ぎた。新しい学年も夏休みが明け、あの時と同じ秋そう、あの西洋館で起こったウイルス騒動から、もう一

スで、自由な青春を謳歌しているに違いない。女子大に進学。今頃は病院の向かいにある大学のキャンパー智世様や美里様はとっくに卒業してストレートに舞鶴

葵さんが選ばれ、副会長に、お雪こと尾鈴美雪。書記は、そこで新たな生徒会役員が選出されたのだが、会長には

なんとこのぼく。

会と対抗している寮委員会の長。つまり寮長になっている。ウイルス騒動の張本人、蘭先輩はというと、いつも生徒

今日はこの病院の産婦人科部長に面会の約束がある。患

腕に抱かれた赤ん坊を観察しているのだが、どう見ても、もう一時間も待っている。その間、この待合室で、母親の者ではないので、今日の診療が終わってからということで、

新聞やテレビ、週刊誌やネットなどを覗いても、産まれ

その半数は男の子みたいな服装をしてい

る。

て来る男女の比率が変わったなどの報道は、ついぞ見たこ

とがない。

れた。蘭先輩のばら撒いた『ウイルス』の効果はまったく大体同じ。いつものように男の子が少し多い程度』と言わ長にインタビューしても『今年産まれた世界の男女比率は今日の診療がすべて終わって、五十代の女性産婦人科部

表れていないようだ。

(あれは、やっぱりただの気体)

というのが正しい結論のようだ。

「まだ、わからんぞ。遅効性のウイルスかも……」

イルスなんてあるものですか。あれは単なる煙」

「なに言ってるの蘭、

一年も経って、

まだ効果が出な

辛辣に言い放つ葵さん。

「そうですよ、いいかげんに悟ってください先輩」

お雪が気の毒そうに言い添える。

年おれは医学部に入るのだ。次はもっといい設備で、必ず「いいや、おれは、あきらめんぞ。今度のがダメでも、来

完成させる!」

似女はこぶしを固め、ぐっと胸を反る。

帰って来た。 その後、ぼくらは電車とバスを乗り継いで舞鶴女学園に

思あるがごとく、ぼくらを見つめている。その尖った屋根の下に二つ並んだ黒い窓が、あたかも意と、丈高い草の上に、あの西洋館の塔が顔を出していた。正門に通じる坂道を登り切り、そこから西に目を向ける

ように古い塔を包んでいた。きらめく最後の輝きが塔の屋根に反射して、まるで後光の今、まさに紅い太陽が西の峰に沈もうとしている。その

蘭先輩は正門の前に立ち止まったまま、その茜色の輝き

をいつまでも眺めている。

の大それた夢も、いつか実を結ぶ日が来るかも知れない。ぼくらは若く、未来はまだ無限に広がっている。『Y染が、三々五々腕を組み、笑いさざめきながら入って行く。開かれた学園の門には、外出から帰って来た女生徒たち

印旛文学の会」について

- 年に2回発行する等の文芸活動を行う。・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を
- とともに、ウェブサイトにその全文を発表する。文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行する
- 会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心があるとともに、ウェブサイトにその全文を発表する。
- では対応できない費用が発生した場合には、会員は会員は、年会費千円を負担すること。ただし、年会費人で、詩や小説、随筆等を創作し、発表する者とする
- その費用を分担するものとする。
- ついては編集会議でその可否を検討する。・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、

作品の長さについては特に規定しないが、

1回に掲

掲載に

- できる枚数は、原稿用紙で100枚以内とする。
- 合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。その他、会の運営に関する重要事項の変更については、

(完

そよのバアバの空中サロン

-その四 友をえらばば―



、が亡くなった。(それが誰なのかは後で知ることになるが…が亡くなった。(それが誰なのかは後で知ることになるが…」底冷えのする十二月のある夜、そよのバアバの親しい友人

その日、わたしは母から頼まれた物を持って、久しぶりに

中学生になってからというもの、部活もあってここしばらくそよのバアバのマンションのドアを開けた。

足がとおくなっていたのだ。

すると、ちょうど喪服を着たバアバが玄関に立っているで

はないか。

「なに、お葬式?」

「そうより一个日よる最一なに、お夢云で」

「らょっこごす、寺間なゝ?」質まっ?「そうなの」今日はお帰りなさい」

ほら、ミキサー」 「ちょっとだけ、時間ない? 頼まれた物、持ってきたよ

「ありがとう でも急ぐからね そこに置いておいてちょ

うだい」

「わかりました」

もと少しちがう表情をして何も話さない。

あわただしく飛び乗ったエレベータの中でバアバは、いつ

「いってらっしゃい バアバ気をつけてね」

外に出て、別れ際にそう言うと、消え入りそうな声でバア

バは、「はい」と言った。

(年をとった一人暮らしの婦人がお葬式に行くって、何か寂

しすぎる……)

たしの中に何とも言えない不条理な感情がわいてくるのを寒空の下、出かけていく小さな後ろ姿を見送りながら、わ

覚えた。

四、五日して、部活が休みだったのでまたバアバの家に寄

った。

「この間はごめんなさいね。お母さん、ちょうどいいのを買

ってくれてうれしいわ。和音ちゃん、使い方、教えてくれる

んでしょ。」

そう言うとダイニングテーブルの上のミキサーを指して、

につこり笑った。

に伝えてちょうだい。」た。テレビで良く見る、ほら、あれがほしいって、お母さんた。テレビで良く見る、ほら、あれがほしいって、お母さん「近ごろおろし金を使うのが骨折れてね。力が入らなくなっ

そうお願いされて久しい、バアバ待望のスムージーミキサ

ーなのだ。

「大丈夫、まかせて。何かある?」

「リンゴとバナナがあるわよ」

心して、我が家のものと同じそれを手際よくセットし、豆乳、わたしは、いつもと変わらないバアバの様子にちょっと安

ニンジン、りんご、バナナ、ハチミツを順番に入れスイッチ

と、「こんなやり方で、はたしておいしいものかしら」と妙を入れた。バアバは、じっと目をこらしてみていたかと思う

なことを言う。

「食べてみたらわかるでしょう」

「そりや そうだわね」

二人は笑って、夕方のおやつタイムを楽しむことにした。

気に入りのガラスコップの中で、乳色になりドロドロしてい鋭い刃に勢いよく撹拌されたジュースもどきのそれは、お

冷蔵庫からやわらかいミントの葉を一かけら持ってきて、コーバアバは、「香りがしないわね。ちょっと待ちなさい」と

ップに落とした。一瞬清々しい香りがプーンとして不思議と

おしゃれな飲み物に見える。

「おいしい!」わたしが大声を出すと、バアバは、「手を抜

いた分の味かな」とちょっと不満足そうだ。

「この間は、誰のお葬式だったの」

コタツの中で身体が暖まってきたころ、わたしは気になっ

ていたことを切り出した。

「私の学生時代の友人が亡くなったのよ」

「そう、親友?」

「そうだわね……大切な人だった」

「悲しいね」

「そうね」

そう言うと、バアバは隣の部屋から一枚の古い写真をもっ

てきて見せてくれた。

「素敵!これって、バアバの若い頃の写真?」

「そうよ」かれこれ五十年近く前になるかもしれないね」

「どの人がバアバ?」

一番端よ」

「これ? そう言えば似てる 若いじゃない」

> そうそう 亡くなったお友達はこの人」バアバは、右から三 「そりゃあそうよ 二十歳になったばかりの頃ですもの

人目のボブショートの女性を指した。

「綺麗な人」

昭和の乙女たちが寄り添い合って満開の笑顔だ。

「彼女が亡くなって、とうとうバアバが最後の一人になった」

「エーッ! なんで皆そんなに早く死んじゃうの! 百歳ま

で生きる人、増えているじゃない「信じられないよ」 わたしは興奮して段々分別がなくなっている。

「寿命なのよ みんなが百歳まで生きるとは限らないでし バアバは落ちつきはらって

少し早い旅立ちだったかもしれないの」

ょう。それぞれよね。たまたまここに写っているお友達が

「ごめんなさい変なこと言って」

の話をしてくれた。 えてくれながら、先日亡くなられた大切な友人『かおりさん』 それからバアバは、一人一人の名前と簡単な人となりを教

思うわ。東京の下町にはめずらしく、のびやかで文化のセンしてから、たしか文房具をあつかう小さなお店を開かれたとでね。お父様は高校の美術の先生をされ、お母様はしばらくかおりさんは、小学五年生の時に長野から転校してきた人

スあふれるご家族だった。

ってあった。女性の胸像が多かったかな。れられないわ。居間には、お父様が描かれた油絵が何枚も飾に、芝生が敷き詰められていてね、バラが咲いていたのも忘当時めったに見かけない白ペンキの柵をめぐらしたお庭

だいた時、私が珍しそうに見ていると、必ず「弾いてみたら」彼女はピアノを習っていてね、たまにお部屋にあげていた

って誘ってくれる。

ないのって、朝からわたしを訪ねてきてね。朝ごはんも食べいのって、朝からわたしを訪ねてきてね。朝ごはんも食べいわ」って「ネコフンジャッタ」を教えてくれて、ふふふ。「わたしは弾けないわ」って断ると、「難しいことなんかな

ったわね

ずに、遊びに行くから、母にたいそう叱られた。

な。この写真は当時のものかもしれない。しばらく他の友達といっしょに時々会うようになったのかのだけれど、高校卒業の頃の同窓会をきっかけに、それから中学はクラスが違って、自然に交流がなくなってしまった

なっていってしまったわ。ない何かを実感するのかしら、そのうちお付き合いも疎遠に互いに年々個性がはっきりしてきて、どこかで自分となじま苦手でね。いっしょに行くことはなかった。大人になるとお行動派だったわね。山登りによく誘われた。でも、バアバはかおりさんは一見しとやかに見えたけど。実はなかなかのかおりさんは一見しとやかに見えたけど。実はなかなかの

だから、かおりさんから結婚式の招待状が届いた時は、本

当に驚いた。

事でたしか二~三年ョーロッパで生活されていたこともあお父様の教え子さんといっしょになられて、ご主人のお仕

っていましたよ。そもそも、かおりさんとは住む世界が違うんだとバアバは思幸運の星の下に生まれた人って、こういう人を言うんだな。

コタツの中が熱くなってきて、わたし達はのどがカラカラ

になってきた。

「お茶入れよう! バアバもちょっと休んだら」

わたしは台所に立って、仕度をする。

一人の女性のほぼ半世紀にわたる物語だ。子供ながらに、

おそらくこれからがクライマックスかな、なんて想像したり

して一息したくなったのだ。

休憩をとって、話の内容がしらけないうちにと気をつかい、

と、わたしは遠慮がちにでもかなり興味をもって催促した。少しして、「バアバ大丈夫? つづきが聞きたいんだけど」

「そう、確かあれは……」そうつぶやきながら、バアバは目

を細め遠くの記憶をたどり始めた。

だったと思う。かおりさんからめずらしくお手紙が届いてね。私が五十?
そう、あなたのお母さんが社会人になった頃

読んでびっくりしたわ。

「なんて書いてあったの? バアバ」

「ご主人が亡くなられ、一人息子さんも重い病で臥せている

って・・・・・」

「かわいそう」

「そしてね、最後にこう書かれていた。」

「自分はこれからどう生きていいか分からない。あなたに

いたい、会って話を聞いてもらいたい」って。

「すごい! バアバ、信用されている!」

絡をとって会いに行ったわ」

「そうとは限らないけど。胸がいっぱいになって、すぐに連

「で?」

うして、こんなことを言ったのよ」

「かおりさんは思ったよりしっかりしていて、安堵した。そ

「そよのさんは、よく私のことを幸せな人ねって言っていた

わよね」

「そうだったかしら」と私が応えると、たたみ込むように

「そうよ、いつも不彼女はつづけたの。

話をしていたわよ」

「生活が苦しかったからかしら、いやね」

「不思議だったわ、あなたが辛いはずの話をするとき、きま

って楽しそうな表情になるのが、

「本当にそんな顔をしていた?」

するけど、それは真実だったと思った。でも、そういうあな ただったから会って話をしたくなったのかもしれない」 になるものだ』って、どこかの国の偉人が言ったような気が 「ええ『人間は自分の苦労話をするとき、生き生きと自慢げ 心配して励まそうと勢いこんで会いに行った人の口から

意外な言葉がでてきて動揺したけれど、なんだか嬉しかった いつにもましてお美しいわ」って。 わ。私はかおりさんに言ったの、「そう言えば今日のあなた、

たの。 の日以来、バアバとかおりさんは、かけがえのない友になっ かおりさんが頬を上気させて笑ったのが忘れられない。そ

「ふーん」

ちゃんにも理解できると思うわ 「よく分からない話でしょ。そう、あと三十年したら、 和音

「三十年しなくてもわかるわ!」

「いいえ、わかってたまるものですか」

とやさしい眼をして大笑いした。そしてかおりさんの話は バアバは人差し指でわたしのおでこを軽く押して、ハハハ

そこまでだった。

してからバアバの家に泊まることにした。 次の日が土曜日だったので、その晩、わたしは母に電話を

しょにお風呂に入り、いっしょに寝た。 いっしょに夕食を食べて、いっしょにお片付けをし、

わたしは、かおりさんが今でもどこかで生きているような気 バアバは疲れてしまったらしく、直ぐに寝息を立てている

がして、妙に目がさえて寝つけない。

仕方なく布団から出て、隣の部屋の明かりをつけた。

ブルの上にはさっきバアバに見せてもらった写真が仕舞わ ず置いてあった。わたしは、もう一度手に取って今はもうい

ない一人一人をじっと見た。

くる。何気なく裏を返すと、そこには、綺麗なペン字でこう 五十年前の乙女達は満面の笑みでわたしを見つめ返して

記されていた。

「善き友を得たいと願うならば、 私自身が向上することだ。

そよの」

浪裏) 試練だ。どこか葛飾北斎のあの大波に似ている。(神奈川沖 しかし確実に未来の自分にも立ちはだかるであろう人生の しかし確実に未来の自分にも立ちはだかるであろう人生の かしない、心の深いところから湧き上がってくる怖れのよ

なんて大見栄を切った自分がやたらおろかに思えた。「三十年しなくてもわかる!」

もそうだ。 強くなれるのだと教えてくれたのかも知れない。かおりさん大波のような困難と向かい合い乗り切って、生きてこそ人はもしかしてバアバは、その人生に幾度も襲いきたであろう

るに違いない。負けないよ、バアバ。ありがとう。 ならば、やっぱり人生は素敵だ。善き友もきっと待ってい

(その四 おわり)

未熟の代償

畑中康郎

ら奪った。失望と後悔の日々が始まり、僕はその後、 良心の強い呵責が、それまでの自信と溌溂とした気分を僕か りついている。 \mathcal{O} 目も浴びぬよう世間の片隅でひっそりと生きた。 青春 出はすべて色褪せ、 青春 が二十代の初めで終わったことだけは確かだ。 の定義がどんなものか、 若さの未熟が招いた、 後悔だけが黒カビのように脳裡にこび 僕にはわからな あの事件がすべてだ。 誰 カゝ の注 L 思

妙な自信ばかりがあって、この大学を卒業すればバラ色の未 義主張はなく、 来があると錯覚していた。 的で、学問探求とは無縁だった。 して半年も経つと、 し借りもやったし、試験直前には三人で僕の部屋に閉じこも その頃、 い加減さは、学生運動についても例外ではない。 合同の勉強会もやった。 僕は寮に住んでいた。 他人の意見に安易に妥協し流され、 仲のいい友人が二人できた。 試験に赤点を取らないことが目 ある大学の学生寮だ。 その程度の勉強だったが、 ノ] 僕に主 - 卜の貸

ことができないし、 なかった。 つまり何も考えていない。だから人生を深く掘る 問題点も見えないから何事も明るく済ま 真剣さが はないない

抵が教授たちの受け売りや世間の評論家諸氏の自由気まま抵が教授たちの受け売りや世間の評論家諸氏の自由気まま年特有の正義感が根底にはあった。しかしそれは感情を沸騰た。そこで交わす議論も表面的で、実に他愛がなかった。青屋だった。僕たち三人に金はなく、居酒屋が溜まり場になった。そこで交わす議論も表面的で、実に他愛がなかった。青屋だった。強強でも学生運動でも悩むことはなかった。

要は、声をかけて無視されることが恐かったのだ。りに終始した。彼女たちと対等に話をする勇気もなかった。た。それは高嶺の花に対する羨望と嫉妬から品のないやり取女性の噂話をするときは、学内の美人女子学生が対象だっ

な論評のコピーだった。

。寮の近くにスナックバーが新規に開店したと言うのであたれは仲間の青山がもたらした耳寄りな情報から始まったある晩、僕の運命を大きく変えた出会いがあった。大学生活も終盤の、四年生のときだった。七月の蒸し暑か

青山は別の仲間との飲み会の後、独り酔った勢いでスナッ

けのテーブル席が三つあるだけの小さな店だった。クのドアを開けた。L字型のカウンター席が五人分、二人男

的な金額で安堵した。そこに僕と樺澤を誘ったというわけだ勘定を払う段になって、彼は懐を心配したらしいが、良心

のなら行ってみるか。それでどうなんだ?いい女でもいる「青山が推薦する店じゃ、大した店じゃないと思うが、安いったこともないのだが、口だけは一人前だった。年の樺澤が恰好をつけて言った。女性のいる店になど行

としたらばあさんの娘かもしれないぞ」としたらばあさんの娘かもしれないぞ」としたらばあさんの娘かもしれないぞ」でおい、悪いけど俺が行ったときは、ばあさんが料理を作り「とは、限らないぞ。実はな、帰り際、外に出たら店の二階「とは、限らないぞ。実はな、帰り際、外に出たら店の二階「とは、限らないぞ。実はな、帰り際、外に出たら店の二階「とは、限らないぞ。実はな、帰り際、外に出たら店の二階「とは、限らないぞ。実はな、帰り際、外に出たら店の二階である。

に見えるもんだよ。夜目遠目って言うじゃないか」「ちょっと待て。外は暗かったんだろ?」暗ければ、皆美人

「いやそうじゃないな。俺は目がいいんだ。彼女はかなりの

美人だな」

「わかったよ。青山がそこまで言うんじゃ、行ってみるかな

僕は樺澤の言葉でその気になり、その晩、三人で出かけた

その娘と話がしたいしな」

『ひなげしの花』から命名したようだ。ヒット曲から命名すと思った。その年、アグネス・チャンが歌って大ヒットした』と書かれていた。僕はセンスのない名前をつけたものだな店の前には、明かりに浮かんだスタンドがあり、『ひなげし

れば店も繁盛するという発想は貧困だ。

中を見たが、青山が噂した若い女性の姿はなかった。三人はう。ママと思しき女性が独り、開店の準備をしていた。店の八時頃店に入ると、客はまだいなかった。早すぎたのだろ

僕を挟む形でカウンター席に座った。

「ママさん、この店、いつ頃出来たの?」ママがお絞りを出したとき、僕が訊いた。

「出来たばっかりなんですよ。開店してひと月かしらね。」

うぞ、ご贔屓にね」

があって、酒好きの学生が沢山いますから。安ければ、僕が「安くしてくれたら、繁盛すると思いますよ。近くに学生寮

仲間を引っ張ってきますよ」

「あら、そしたらあなた方、そこの学生さんなの?」

全国的に多少は名の知れた、僕らの大学の名をママが口に

した。

デコジュンキョン、ママジニマノン・ノン・「そうです。女に飢えた、そこの学生です」

青山が口を挟むと、ママがニヤッとした。

「ここにも、女はいますから、気軽に来てくださいね

青山はそれには応えずに訊いた。

たとき二階から顔を出した娘さんらしい人を見たんだけど、「ママさんの他に、若い女性がいるでしょ? 俺、この前来

その人、今日います?」

「若い人たちには、私のような年増ではやはり人気がないわっての勢いが少し鈍った。

***-

僕がママに助け舟を出した。

ような社会経験がないから、勉強になります。いろいろ教え 「そんなことないですよ。世間知らずの我々にはママさんの

てください」

らなかった。ママは、内心、がっかりしたのでは、と後で思 ではなかった。彼女はまだ十分に魅力的だった。僕は気が回 ったが、そこはやはり大人だった。 ママの女性としての本当の魅力は、むしろ人生経験や知識

「そうね。あなたにはいろいろ教えてあげてもいいわね」 さらっと受け流してくれた。

青山が今度は口を尖らせた。

「俺にも教えてくださいよ」

「あら、急に人気者になったわね。いいわよ。訊いてくれた

らいろいろと教えるわ」

何故か、僕はママに好感を持った。

や青山は、若い女性に会えなかったためか、自然と足が遠の それからは独りで『ひなげし』に通うようになった。 樺澤

通えたからだ。あるいは、 僕はかなり頻繁に通った。 ママが贔屓して安くしたのかもし 料金が安く、貧乏学生の僕でも いた。

れない。

僕が店を訪れるのは、 大抵、 夜の早い時間帯で、 店内には

いつも客はいなかった。

のこと、育った環境、将来の夢やすでに内定した会社のこと まで話した。その会社はわが国有数の大企業だった。 ママとはいろいろなことを話した。鹿児島にいる両親や兄

どうしてそこまで話したのか、自分でもわからない。 頭 \mathcal{O}

どこかに、美しい娘の影がなかったとは言い切れない。 まだ健在だったが、そのときはママの方が本当の母親のよう 、ママを人間的に信頼していたことも事実だ。鹿児島 の母は

な気がした。実際、彼女と話していると心が安らいだ。 一方、僕もプライベートなことを聞き出した。多くは娘さ

んのことだった。

た。 ママは娘さんのことになると、いつも心配そうな顔になっ

いから男性に人気があったのに、失恋を一度しただけで男嫌

「あの子には男運というものがないのよ。気立ても器量もい

いになってしまったのね」

娘さんの名は純子だった。彼女は銀座の婦人服専門店で接

客の仕事をしていた。

ママの思い通りにはならなかった。
酔うと大抵本音を語るから、格好の男性研究になるのだが、する必要があるとママが言ってもダメだった。店の客たちは顔を出さなかった。酔客が苦手なのだ。もっと男性の研究をその純子さんだが、ママが手伝いを頼んでも決して店には

、こればっかりは難しいわね」「私もね、早くあの子には幸せをつかんでほしいのだけれど

て黙った。 いつも溜め息だった。僕も何を言えばいいのかわからなく

しくってね」

外なことを言い出したのだ。ところが、あるとき、驚くような展開になった。ママが意

「ねぇ、奥原さん。お願いがあるの。純子と一度会ってくだ

さらない?」

いたのだ。彼女はすでに三十歳で、それを聞いたときに僕は僕は面食らった。すでにママから純子さんの年齢を聞いて

僕はやんわりと断ったつもりだった。しかしママは何でも「僕のような若造に純子さんの心の傷は治せませんよ」

軽く失望した。

ないように笑った。

言ってみれば勉強ね。だから気楽に考えてほしいの」性と少しでもお付き合いができればいいかな、と思ったの。「そこまで奥原さんに求めないわ。そうじゃなくて、若い男

会う気になるかな?」 「だったらいいですけど。でも肝心の純子さんが僕なんかと

言い出したのよ。やっとその気になってくれたから、私、嬉たのこと話してあるの。そしたらね、珍しく会ってもいいと「嬉しいわ。会ってくださるのね。大丈夫、あの子にはあな

れば、通っている大学の名前に惹かれたのだろう。当時は、人はが、通っている大学の名前に惹かれたのだろう。当時は、僕は押し切られた。どうしてここまで強引なのか?(勘ぐ)

「まだ他のお客さんがいないから、純子、呼ぶわね。きた大学によって将来の成功が影響される時代だった。

はもう帰っているの」

ひょっとしたら僕のそんなところにも好感を持ったのかもに対して度胸がなく、扱いに不慣れだったからだ。ママは、た。何故なら、彼女いない歴が間もなく五年だったし、女性突然の思ってもいない成り行きに、正直、僕の胸は高鳴っ

しれない。

てきた。始めから僕と会うことを想定していたように思う。ママは二階に上がって行き、すぐに純子さんと一緒に降り

化粧を施していたし、外出着のままだった。

しては高く、一メートル六十五くらいはあっただろう。山の言った通り、大変な美人だった。身長もその頃の女性に追身や大学の仲間たちが持つ軽すぎる態度や幼稚さがなく、彼女を見た瞬間の感動は、今になっても忘れられない。僕

、僕は彼女に優越感を持った。何となく、自分が優位に立ての僕に対する視線は初対面のそれではなかった。その瞬間に頬をかすかに染めた。すでに陰から僕を見ていたのか、彼女ママが僕を紹介した。純子さんは、そのとき、俯き加減に

ると思った。

、。と、といっていくでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、ママが純子さんを僕と結婚させたいのだと

けるなら光栄です」「わかりました。こんな綺麗な女性とお付き合させていただ

僕は無難な受け答えをした。僕たちの交際は、こうして始

まった。

。僕は次第に気疲れを感じた。で、必要以上に相手に気を遣い、一生懸命に尽くそうとしたで、必要以上に相手に気を遣い、一生懸命に尽くそうとした失恋した原因がわかった気がした。彼女は世話女房のタイプ何度か会ううちに、早くも気づまりを覚えた。純子さんの

や言葉遣いを細かく指摘した。人生の少し先を行く先輩としいなどを教えようとしたのだろう。とくに食事マナーや服装く一人前の社会人になるよう必要な知識、嗜み、挙措振る舞いろいろと僕に注意した。僕が学生で未熟だったから、早。僕は次第に気疲れを感じた。

感じた。んな人ではなかったが、僕は自分がバカにされているようにんな人ではなかったが、僕は自分がバカにされているようにしかしわかっていても、僕はムッとした。彼女は決してそ

て、何も知らない子供をリードするような感覚だった。

約束をせずに半月ほど放置したことがある。何度目かのデートのとき、いつもは次の約束をするのだが

電話があったわけではなく、赤い公衆電話が階ごとに設置さ純子さんから寮に電話が頻繁にかかった。当時は各部屋に

れていた

合っていることが彼にわかってしまった。らない。二度目に樺澤が取った。それで僕が純子さんと付き始めは居留守を使った。だが、寮の電話は誰が取るかわか

仕方なく、樺澤に口止めをして事情を話した。すると彼は

開口一番に言った。

おい、それは危ないな」

僕にはその真意がわからなかった。

「どうして?」

「どうしてって、お前ホントにわからないのか? 恋愛オン

チもいいところだな」

尚も黙っていると、こう続けた。

このまま行ったら危ないぞ」
彼女を傷つけないように、今のうちにうまく別れるんだな。
。結婚する気がないなら、もうこれ以上会わない方がいい。
ずだ。恐いのは、お前がまだ二十二だろ。で、彼女は三十だずだ、恐いのは、お前がまだ二十二だろ。で、彼女は三十だ

結局は、彼女自身が年の差を認識し、途中で結婚を諦めるに彼女が結婚したい気持ちでいることはわかっていた。でも

「彼女の三十歳は気にしていない。それより、結婚してから違いないと高を括った。僕は樺澤にウソをついた。

る。でも、それだって結婚すれば変わるし、第一、男に尽くが問題だよ。確かに彼女といると気づまりを感じることはあ

してくれる女なんていうのも悪くない」

識する人も出てくるだろう。今決めてしまったら後悔するかい。これから嫌でもいろんな女性と出会う。中には結婚を意ことはない。だけど、これだけは言っておく。お前はまだ若「ふーん、そうか。お前がそこまで言うなら、俺に何も言う

確かにそうだった。早めに別れることが妥当かもしれなかもしれんぞ」

った。しかしこのまま別れたら、勿体ない気がした。

った。純子さんといろいろ話をし、彼なりに彼女の印象を持事情を話し、僕の親友という立場で純子さんに会わせてもら僕の話を聞いた後、樺澤は『ひなげし』に行った。ママに

「奥原、お前はなんて運のいい奴なんだ。あれほどの美人で

ち帰った。

、優しく、しかも心細やかな女性はいないぞ。それと、彼女

こう言うんだ。

によ」 『私が奥原さんとお付き合いしたいのは、俺が付き合いたかっ で、破女を大切にしてくれよな。本当は、俺が付き合いたかっ で、感動したよ。彼女、本当にお前のことが好きなんだよ す。彼と一緒なら、辛い人生でも生きていけると思ったの』 で、就職した会社が大きいからではないわ。平凡でもいいんで にはないのは、彼が大学出だとか

樺澤は本気で言っているようだった。

さにもようやく慣れた。 交際が四ヶ月を過ぎ、師走を迎えたころ、彼女の一生懸命

ように思う。アルコールの入った勢いで、僕は唐突に言ったりない。何とか早めに彼女を抱いてしまいたいと思った。どいから見える夜景も美しかったし、周囲の恋人たちもすべその晩は、クリスマスで独特の雰囲気だった。新宿の高層というない。何とか早めに彼女を抱いてしまいたいと思った。ところが関係は深まったが、まだ体の関係がなかった。あ

「ねぇ、僕たちまだ一度もないよね」

彼女にはすぐに、僕の考えていることがわかった。急に獸

ってしまった。

彼女は俯き、二人の雰囲気は今までにないほど張り詰めた「恋人同士が何もないというのはおかしいと思わない?」

「私、こんなこと結婚するまでしたくない」
。暫らくして、彼女は振り絞るように小声で言った。

あってもいいじゃないかと思った。拒絶されると今度は無性るのか? 僕は反発を覚え、それなら尚のこと、体の関係がこんなこと? それに何だ、結婚が近いともう思ってい

「そうか。嫌ならいいよ。もう別れようか」

に抱きたくなり、それでつい口走った。

言葉をかけ仲直りするのだが、そのときは黙っていた。しばりそうだった。僕は決して冷酷な男ではない。しかしここでいる。僕の気持ちも萎え、せっかくのクリスマスが台無しにな深刻だった。顔がこわばり蒼ざめ、まったく元気がなくなっ深刻だった。顔がこわばり蒼ざめ、まったく元気がなくなった。

らくして彼女は諦めたようだ。溜め息をつきながら、

「わかったわ。あなたのいうとおりにする」

深刻なものなのか、僕には理解ができなかった。 と言った。涙ぐんでいた。セックスが、どうしてそこまで

とうとう僕たちは結ばれた。贅沢だったが、新宿の高層ホ

テルに部屋を取り、一夜を共にした。

る存在になり得る、と今にしてわかった。と含め人間というものが、無意識ながらも他者を深く傷つけたく思い出せない。若い僕にとって、無我夢中の体験だったそのとき、彼女がどんな様子だったか、今となってはまっ

せるようになった。

でいの中ではぎこちなかったが、それでも少しずつ笑顔を見度に、僕がラブホテルの方に向かうと黙ってついてきた。ホ度に、僕の言うことに何でも従うようになり、デートのになった。僕の言うことに何でも従うようになり、デートの

からは、行為の後、そのままそこで別れた。彼女は悲しそうで送り届けてから別れたのだが、ホテルに行くようになって会うと、それまでは必ず食事をし、彼女を自宅スナックま

だったが、僕には何も言わなかった。

わずかになっていたが、彼女と関わらない日は殆どなかって女と過ごした時間は長い。大学を卒業するまでの時間

は

たくない日もある。会わない日前は必要だった。当然、会いたくない日もある。会わない日前であっても、彼女は寮に電話をかけてきた。会わないと時間であっても、彼女は寮に電話をかけてきた。会わないとおめた。そんなとき、瞬時、別れて自由になりたいと言った。本のであった。当然、会いだが、僕にも自分のための時間は必要だった。当然、会いだが、僕にも自分のための時間は必要だった。当然、会い

を考える余裕が徐々になくなっていた。ており、事前の勉強が必要だった。正直なところ、純子さん席要請がきた。大阪本社からだった。研修テキストも送られ丁度その頃だった。内定している会社から入社前研修の出

ら会って、と電話で訴えてきた。仕方なく会ったが、会うとは極度の不安に陥ったようだ。ほんの少しの時間でもいいかしばらく会えなくなるよ、と純子さんに伝えたとき、彼女

すぐ彼女は涙目になった。

そんな言葉を聞くと、それこそ僕の方が恐くなった。「もう会えなくなってしまうの?」私恐い」

慰めるように言うと、彼女の目から涙が溢れた。僕は彼女「そんなことないよ。入社後、君を大阪に呼ぶからね」

を不安な思いで見つめた。

約束した。 た。彼女には、落ち着いたらすぐに呼び寄せることを電話でた。彼女には、落ち着いたらすぐに呼び寄せることを電話で三月に大学を卒業した。そして入社のため大阪へと出発し

ぞれ忙しく、しばらくして疎遠になった。は別々になった。会社の電話番号を教え合ったものの、それ棒澤は東京都内、青山は仙台の会社に就職が決まり、三人

てしまった。
て真剣な勉強が必要だった。純子さんのことはまったく忘れで、憶えなければならないことが山積していた。社会人としす多忙になった。なにしろ、やることが初めてのことばかりす多性になった。なにしろ、や

その後、大阪で二度目となる研修が始まった。今度の方が

と絞られた。 本格的だった。入社前研修だけで十分なのに、またみっちり

改めて認識した。仕事に没頭せざるを得なかった。考えた。社会人になり、会社から給料をもらうことの重みをより、営業知識の不十分な新人の僕にも容赦がなかった。先輩社員と一緒に外回りをさせられたが、お客様は結った。先輩社員と一緒に外回りをさせられたが、お客様は結った。先輩社員と一緒に外回りをさせられたが、お客様は結った。先輩社員と一緒に外回りをさせられたが、お客様は結った。

多少の冷却期間があってもいいと思った。た。悪気はまったくない。ただ少々重荷に感じていたから、新しい住居も決まった。しかし純子さんには知らせなかっ

五月初めのことだった。営業に出かける準備をしていた僕

のところに、玄関受付から内線電話が入った。

「あのー、受付に平野さんという女性の方がお見えですが…

ろが取った行動は、思いがけず真逆だった。の心は激しく痛んだ。会わなければならないと思った。とこ受付の女性の怪訝そうな声が受話器から響いた。瞬間、僕

「そんな女性知りません。何かの間違いと思います。帰って

もらってください」

のだろう? と僕は言ったのだ。どうして、そんな冷酷なことが言えた

今から思えば、純子さんは大変なショックを受けたに違いなかったと言う。薄化粧で地味な服装だったから、尚更、そた。彼女の話では、純子さんはかなり思い詰めた様子だったた。彼女の話では、純子さんはかなり思い詰めた様子だったなかったと言う。薄化粧で地味な取り思い詰めた様子だったなかったと言う。薄化粧で地味な服装だったから、尚更、それの玄印象を与えたのかもしれない。

、逆に連絡が取りにくくなったのだ。うなら取れなかった。何故なら、冷淡なことをしたからこそ僕はその後も彼女に連絡を取らなかった。いや、正確に言

気にはしていたが、そのまま放置して三か月近くが経った

た。樺澤であることは取り次いだ交換手の伝言でわかった。突然、東京の樺澤から会社の交換台を経由して電話が入っ

因が自分以外に考えられなかったからだ。

から声をかけた。しかいとはしなかった。それで僕の方しかし彼はすぐに話し出そうとはしなかった。それで僕の方

一棒澤か? 久しぶりだなぁ。今どうしている? 変わりな

いかい?」

のか、そのときの僕にはまだわからなかった。それでも、彼は尚も無言だった。その沈黙が何を意味する

「何だよ。自分から電話してきたのにどうしたんだ?」どうのか。そのときの僕にはまたれからだかった

して黙っている?」

ついに口を開いた。 そのとき、樺澤はどう話すべきか迷っていたのだ。

あっと驚いた。急に目の前が真っ暗になった。そのときの入に言わせてもらう。平野純子さんが亡くなったんだ」「何から話していいのか、俺にはわからない。だから単刀直

で僕を見た。彼女の死が悲しかったことは当然だが、その原ってしまい、大声で泣き出した。同僚たちが驚きと困惑の目。僕は胸が締めつけられ、机の上に突っ伏した。感情が高ぶどうして死んだ? だが、思い当たることがいくつもあった激しい衝撃は、それまでの人生にもその後の人生にもない。

電話の向こうの樺澤からも次の言葉が出てこない。長い沈

黙の後、

涙声で続けた。

メン屋さんに訊いたんだよ。そしたら…」「あのな、俺、何の気紛れかな、会社が早く引けて久しぶりて、のなげし』にも行った。ところが、店はなくなっていたくなってわざわざ寮まで行ったんだ。ついでに、後輩を誘った。それで、ママや純子さんの消息を知ろうと、隣のしたかったし、懐かしに学生寮を訪ねたんだよ。後輩と話がしたかったし、懐かしにかのな、俺、何の気紛れかな、会社が早く引けて久しぶり

そこで再び言葉に詰まった。

「そしたら?」僕は涙声で促した。

たんだ」
は、お前と親密だったから、それでまずはお前に電話してみよ。お前と親密だったから、それでまずはお前に電話してみが大阪へ行って、まだ二か月とちょっとのころだ。六月頃だ「純子さんが自殺したと言うんだ。ショックだったよ。お前

そこでわずかに間があった。

僕に答えられるはずもなかった。その沈黙が樺澤の問いに、まさか、お前が彼女に何かしたわけじゃないよな?」「だけど、そんなことはないと思うが、念のため訊くんだが

対する答えだった。樺澤が怒り出した。

てなんだ? お前は人でなしだ。彼女を殺したのはお前だ!。あんなに素晴らしい人を! あんなにいい人を! どうしんだな! お前の話では、彼女、尽くすタイプの女性だっただ。危ないぞって。それをお前は軽く考えた。彼女を振った「そうか。やっぱりそうか。だから、俺はお前に忠告したん

く動揺した。全身の力がすべて抜けた。反論がまったくでき僕は激しく罵られ、純子さんを殺したとまで言われて激し

いことはそれだけだ」「もう、お前とは二度と会いたくない。絶交だ。俺の言いた

なかった。

とも電話で話すこともなかった。 樺澤の電話は一方的に切れ、以来、今日まで二度と会うこ

そこには次のように書かれていた。森。発信人として『平野純子 母』とだけあった。務部気付で届いた。裏封筒には住所の記載がなく、消印は青しばらくして、追い打ちをかけるように、一通の封書が総

ら書きます。 『時候のご挨拶は省略させていただき、早速、純子のことか

あの子は自ら命を絶ちました。わざわざ多摩川にまで出か

そこで入水しました。

な遺書があの子の部屋に遺されていました。私は震えながらあの子の三十一歳の誕生日、六月十一日のことです。簡単

捨てられました。

めんなさい』 『私は弱い人間でした。お母さんを遺して先に逝きます。ご

読みました。

さん、あなたとの関係がうまく行かなかったのですね。たったそれだけでした。でも原因はわかっています。奥原

いていたときでした。

れはわずかで、一番の期待は男性とふつうにお付き合いがでたら、あの子を幸せにしてくれると思ったのです。でも、そ子と結婚してほしいという気持ちはありました。あなただっでした。紹介したとき、正直に言うと、私の心のどこかに純元はと言えば、私があなたを純子に紹介したことが間違い

を抱いていたのです。そのせいなのか、男の人に一生懸命尽あの子は幼い時に父親を亡くして、男性の愛情に強い憧れ

以前の明るい性格に戻ってくれることでした。

ます。くすことで自分を見つめてほしかったのだ、と私は思ってい

ていた男性の子を妊娠したものの堕胎を強いられ、その後、たときでした。辛い失恋を味わったのです。心から愛し信じあの子にとって大きなショックは、あの子が二十三になっ

した。あなたのお蔭です。その半年があの子の最も幸せで輝明るくなりました。生き生きとして、やっと私も安心できまでも、あなたとお付き合いを始めた半年くらいで、すごく心に負った傷は、私の想像以上に深いものでした。

何も聞いておりません。ことが原因だと思っていましたが、あの子から詳しいことはた。ふさぎがちになったのです。あなたと離れ離れになったところが、あなたが大阪へ去ってからは様子が一変しましところが、あなたが大阪へ去ってからは様子が一変しまし

うか、お元気でお暮しください』
純子の冥福を祈って、心静かに余生を送ります。あなたもど青森に戻りました。何の希望もなくなりました。これからはあの子が死んだ後、私はあの店を売り払い、生まれ故郷の

>も僕に対して、恨み言をまったく言っていないことだった手紙はそこで終わっていた。辛かったのは、純子さんもマ

っと苦しみ続けた。 一生かかっても償い切れない重い十字架を背負い、僕はず

た。その場所に花束と線香を供え、彼女の霊に手を合わせらだ。その場所に花束と線香を供え、彼女の霊に手を合わせた。墓参したかったのだが、お墓がどこかわからなかったか年年六月の純子さんの命日には、多摩川の入水現場に行っ

女に詫びた。
。三周忌のときだった。あの大阪本社の受付のことを再び彼。三周忌のときだった。あの大阪本社の受付のことを再び彼

子さんの声がはっきりと僕の心に響いた。『ごめんね』と心の中で繰り返すと、驚いたことに突然、純

彼女の霊に違いなかった。死後の世界は確実に存在するとしもあなたのこと恨んでいないわ』『もういいのよ。私も悪いところがあったの。だから、私少

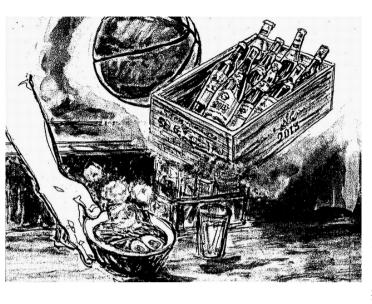
思ったし、僕の死後、必ず彼女に会えると確信した。

かった。だが、僕は心に大きな安らぎを覚えた。た。その後何度も祈ったが、彼女の声を二度と聞くことはなだが、聞こえたのはそれだけで、しかもその瞬間だけだっ

それはわからない。こそ妻になってほしいが、僕を受け入れてくれるかどうか、こそ妻になってほしいが、僕を受け入れてくれるかどうか、純子さんは、今もずっと僕の心の中にいる。来世では今度

この前・この間 前編

いんば華子



もうんざりするほど暑かった。 七月の終わりだった。 スケ部の顧問だった先生が亡くなったと訃報が来たの 梅雨が明けて夏の盛り、 昼間も夜

じられない。親父は寂しくなった頭を汗で光らせながらまだ 料理 が心配になる。六十を過ぎた親父も同じ空間にいることが信 風耳の側を抜けていった。長時間暑い場所にいたので熱中症 は先に家へ戻れと、油と湯気で曇った厨房の中で言った。天 注文の料理を作っていた。 につけていた汗と油でぐっしょりした手ぬぐいをとると、夜 ような所から解放され、一息つくことができた。外に出て頭 の救いともいえるような、空気のほとんどが気体化した油の 父と母、そして自分の家族三人で切り盛りしている『中 四川』の夕食時のピークが過ぎたとき、親父は、 お前

ルほど離れた自宅に戻った。わずかな時間のうちに蚊に刺さ ツの葉に露が付いた頭がいとおしくなった。 サンダルを農道のアスファルトに擦りながら五百メート 俺もいやでもあんな頭になるんだろうなと思うと、トドマ

スマホが鳴った。地元に残って就職した同級生の一人で、 れた首を掻きながら汗を拭ったとき、ポケットに入れていた

部

44

活も同じバスケ部だった、優弥からだった。

と葬式の日程は……』当時のクラスとか、連絡先わかる人に拡散よろしく。お通夜当時のクラスとか、連絡先わかる人に拡散よろしく。お通夜たから、連絡が回ってきた。中学時代のメンバーや先輩後輩、命水が同じ学校に赴任して、一緒にバスケ部の顧問をしていい。『訃報。中学のときバスケ部顧問の佐伯先生が亡くなった。

当たっていたのだ。俺も三十二になり、 とを知った。五年後も同じ状態では、 でやっているコメ農家をやるにも、 か揶揄される自分も、 めているし、実家を継いでのんびりしているんじゃないかと 家族の報告も落ち着いてきた。サラリーマンたちは多忙を極 盛りだった。このぐらいの年齢は、 していくことが必要だ。 しい。その時に、放課後と毎週末俺たち中坊の部活の指導に 佐伯先生は、世話になった当時三十代半ばくらいで、 常に状態を見極め、 田舎の中華屋の経営の厳しさや、 わずかな時代の変化にも柔軟に対応 結構なコストがかかるこ 仕事もプライベートも忙 立ち行かなくなるだろ 周囲の結婚や新し 兼業 働き V

生に出会ってから今日までの年数を指折り数えた。佐伯先生冷やしておいたウーロン茶をコップに注ぎながら、佐伯先

ことになるなんて、予想もしなかっただろう。早すぎる。当時の先生の年齢よりも若い俺たちに見送られるは、五十代で亡くなったことになる。人生の幕を閉じるには

に死因についての詳細はなかった。

俺は携帯に登録してあるアドレス帳やラインの連絡

先か

死因は病気が原因なのだろう。しかし、優弥からのメー

ル

ら、部活のメンバーを選んで送った。

ど、長い付き合いになる。

「スマホの画面に現れる名前を流していたところ、チリっとが、長い付き合いになる。
にとはしたくはなかったが、計報の連絡ならば仕方がない。
にとはしたくはなかったが、計報の連絡ならば仕方がない。
にとはしたくはなかったが、計報の連絡ならば仕方がない。
が近いこともあり、近所付き合いが続いている。作りすぎたが近いこともあり、近所付き合いが続いている。作りすぎたが近いこともあり、近所付き合いが続いている。作りすぎたが近いこともあり、近所付き合いが続いている。

か、合う人、合わない人というのはいる。俺にとって紅美は、長い付き合いにはなるが、個人の気性や相性とでも言うの

ごまかしがきかない人というのは少々厄介だ。 こった時も、原因となった発言や状況を一字一句間違えず記 ぐで、人の形をしたカメラのようだった。記憶力がよく暗 たことを説明してみせたりしていた。周囲からしてみれば、 憶していて、周りに再生動画を見せるように、 れは今も続いている気がする。 前でいつも自分の無防備な姿を晒している様な気がして、そ 物のテストでは、クラスで一目置かれていた。 いわゆる苦手なタイプだった。 紅美の視線は、 俺は、 たった今起き いさかいが 何かと真 紅美の 0 起 直 記

ている」なたも、成功していくあなたも。私が、あなたの生き方を見なたも、成功していくあなたも。私が、あなたの生き方を見「ずっと見ている。ことごとく傷ついてダメになっていくあ

介護 る。 らいだが、 紅美自身、 様な気がしてしまうのだ。 ためか、どんな時も紅美と会ってしまったときは気が重くな 被害妄想も甚だしいが、 の職に就き、 名前を見るだけで、 近所のうわさ話に紅美の浮いた話はない。 東京に出たり結婚して所帯を持ったりしていいぐ 実家暮らしを続けている。 神経が張り詰めるような気がする。 顔を合わせたくないと思っている 紅美の存在自体がそう言ってい 俺は、 紅美が何 地元で る

現実になることは、少なくともすぐにはなさそうだ。かの理由で家を離れることを期待していた。しかし、それが

りになってからだった。 解していたつもりだが、身をもって知ったのは二十代も終わ をうそう自由になれるものではない。十代の時は、字面で理 うか。実際は、職業や生活の拠点、体裁や経済的な理由から、 移動の自由が明記されていたのは、憲法の第何条だっただろ 環境に居心地の悪さを感じたなら、ここから去ればいい。

く 岩井家の一人息子であることを理由に、 かった。自由に自分で決めてい で店舗経営を学び、千葉県の田舎の中華屋なんて継ぐ気はな 間を作りたいと思っていた。大学時代から働いていたカフェ りした空間でも、気持ちを落ち着かせてゆっくり過ごせる空 8 自分の店を持ちたいと思っていた。田舎の中華料理店ではな ルバイトの生活を送っていた。在学中から漠然とではあるが ようとはしなかった。長男であるという体裁から、 都内の大学卒業後、 地元を離れたくても離れられなかったのは、 フレーバーコーヒーや自家焙煎の 就職活動もせず、アパートを借りてア いと言って俺を育てた両親は 豆を中心に、 自分の選択を引き留 自分自身だ。 こじんま

親父にはあったのかもしれない。むつもりでいた。将来性のない店を渡したくない気持ちも、もしたが、当時の親父は、祖父から始めた店を自分の代で畳った祖母には罰当たりなことを言うもんじゃないと怒られ

本当に店を出すという決意に変わった気がした。に背中に電流が通ったような衝撃があった。伸びてこの時に、援助してやる」と面と向かって言われたときは、驚くと同時店をはじめたいと伝えた時に、「あまり多くは出せないが、

ったのかもしれない。

立が俺には残った。この程度の借金で済んだのも、運がよか物件からわずか二年で撤退することとなり、二百数十万の借自分の考えた以上に容易ではなかった。賃貸契約を交わしたった。一国一城の主になったのはよかったが、店舗の経営は、二十八の時、貯めた資金と親からの援助で、念願の店を持

圧し掛かった閉店作業に、指先一つを動かす気力も持っていも使った。すべてのエネルギーを出し切った後、ずっしりとが鳴き続ける自分の店を変えたくて、必死になって頭も身体かった。カフェ経営中もがむしゃらになって営業し、閑古鳥再就職してどこかの会社に勤めることもすぐにはできな

のような状態で、すぐに働く気持ちにはならなかった。かれた。自分は魂の抜けた器だけになった。燃え尽き症候群

り立てもある。
収入がなければ、すぐに生活は苦しくなる。銀行からの取

考えたいと、出戻る決意をした。 泣く泣く、実家に電話をかけ、今後について時間をかけて

「まいった、まいった」といって実家に帰った。よかったんだとばかにされながら、上っ面の笑顔を下げて、った。親族や友達に慰められながら、あるいはやめておけば初めて社会に出て手にしたのは、負け犬という称号だけだ

身をもって経験したのだ。 自分の選択に後悔があるわけではない。自分を慰められる 自分の選択に後悔があるわけではない。自分を慰められる 自分の選択に後悔があるわけではない。自分を慰められる 自分の選択に後悔があるわけではない。自分を慰められる

めた借金を完済するためにも、『中華料理 四川』を経営不振何よりも、俺には失敗しても帰れる場所があった。返し始

に陥らすわけには いかない。

揚げ丼、 ネギが多めの 自家製煮卵付き中華麺、)麻婆豆腐、 サービスメニュー どのメニューにもファンが の辛味ソース唐

 \mathcal{O} \mathcal{O} 輪 後 . る。 の中に入ったのだ。 の二次会、 現場が近くにある業者の昼食、 誰かの生活の中にこの店がある。今、俺もそ そう思いたいというのが本音だ。 役所からの注文、 直会に 俺

年を重ねていくのだ。

の居場所は、生まれ育ったこの場所で、これからここでまた

出しされるのは気分が悪いだろうと思い、提案したことはな 概念がないようだ。出戻りの自分が言える立場でもなく、口 考えて休みにするところもあるが、先代も親父も、そういう

親父は仏壇のある部屋の畳の上で、大の字になってひっく

りかえっていた。

\ \ \

「親父、数珠と袱紗の場所知らないか? 今日夕方からお

夜があるんだけど」

「お通夜だ? 誰が亡くなったんだよ

「中学の時の、 部活の顧問だよ」

を起こした。息子が同級生ならば、近所であるとか親も同級 同 ≧級生のお通夜とでも思ったのか、シャツに股引姿の状態

生であったりして、 情報がほしいのだ。

喪服を一式そろえようと、

朝から家の中の古いタンスや仏

「はあ。若えんだろう。 「ああ。まだ五十代」 もしかしたら、俺よりもずっと」

「そりやあ、もったいねえな」

こはもう見たと言おうとしたところ、下の方から古くなって 親父は立ち上がると、 仏壇に付いた引き出しを開けた。

茶色くなった箱を出し、 上下に振った。

何となく営業を続けている。アイドルタイムは店舗の状況を うやり方だ。昼と午後とを分ければよいのだが、惰性のまま と母から呼び出されてサンダル一つで飛び出していくとい 体午後の二時から四時まで、親父は家に戻る。時々客が来る を探し出せず、昼休み中の親父に尋ねた。客が来ないから大 壇の引き出しを開けていた。どうしても弔事用の袱紗と数珠

48

「男用の数珠はこれだよ」

「ああ。ありがとう」

て奥に移動しちゃったんだろう。店もあるからって、大体不「しばらく近くで不幸がなかったからなあ。使わないからっ

幸があるとは母ちゃんに行ってもらっていたしな」

親父でだめなら母親に聞こうと思っていたが、自分の所持

品の場所は把握していたようだ。

「お前が家を出てってから、手間がかかるのは俺だけだって「ありがとう。母さんじゃないとわからないと思ってた」

言われちまったんだ。自分のことくらいやってやるってんだ

笑った。

ょ

「母ちゃん、息子二人も育てたっていうんだから、少しは楽

親父は大口を開けて、銀のたくさん詰まった奥歯を見せて

にさせてやんねえとな」

ことを思い出した。母は隣の県の出身で、親父とは高校の同俺が店を開けたての頃、母親の両親が立て続けに他界した

級生だった。近くに通える距離の高校がなく、県境を超えて

通っていたらしい。

たのかもしれない。親父が数珠の場所を覚えていたのも、お思えば、その時が俺にとっても、親父にとっても節目だっ

そらくは、最後に使ったのが母の両親の葬式だったからだろ

う。

戸のガラスが、ガラガラと音を立てた。あら珍しいと応対す親父の休み時間を邪魔しないよう部屋を出ると、玄関の引

る母の声が聞こえた。

「翼、いらっしゃい。紅美ちゃんが来ているわよ

俺は、嫌な予感がしつつも玄関へ向かった。紅美に会うこ

と自体苦手なのにこのタイミングとなると、今夜のお通夜の

ことだ。

「こんにちは」

挨拶は紅美のほうが早かった。それもあって、先手を取ら

れたような気がして負けたような気がする。

「じゃあ、私は店に戻るわね。お父さんにはもう少し休んで

からでいいって言っておいて」

母はそのまま店へ向かっていった。

扉が閉められたあと、紅美はくくっと笑った。

「紅美ちゃんだって。おばさんずっと昔のままね」

俺も、 紅美の母さんとか会うと、中学生くらいで止まって

いるからな」

無地のズボンでラフな格好をしていた。昔は、といっても子 やっと初めて目が合った。 紅美は休日なのか、Tシャツに

ているせいだろう。すっかり大人のはずなのに、子供の時の 供だった中学生の時だが、背中まであった髪を二つに結って いた。今は扱いやすいショートカットだ。幼少の頃から知っ

姿も重なって、若く見える。

緒に乗せて行ってもらうことできる?」 「今日の夜のことで、お願いがあってきたんだけど、私も一

うだ。 だったけれど、同僚や教え子の多いところを会場に選んだそ 抵の市内の葬儀はそこで行われている。先生の住まいは他市 らも、できるだけ乗り合わせで来いと連絡が来ていた。 とたくさんの人が集まるだろう。訃報の連絡をくれた優弥か 十年ほど前に市内に初めて大型の葬儀場ができた。今は大 先生の葬儀となると、親戚、 同僚から今までの教え子

> じゃ、 翼ぐらい」

「……そうか。成人式終わってから十年ちょっと経ったもん

な

「ほんとうにあっという間だったし、今となったら、

随分変

わったことも多いわね」

「ああ、まあな」

ことは、いい気持がしない。当時のことを冗談交じりに話せ には仕上がらなかった。 のだ。渋みが多すぎて、数年たった今でも、 気持ちが淀んで塞込みたくなってしまう。その年に作ったワ ないことはないが、人生のどん底を味わった期間であったし インに例えるのなら、瓶底に沈んだ澱が他の生産年より多い っているのだろうか。あまり他人から根掘り葉掘り聞 変わったことと変わらなかったことの中に、 好んで飲める味 俺のことも入 いれれる

ことを期待するしかない。 方がないとあきらめ、できるだけ無難に一日が過ぎてくれる 紅美と一緒にお通夜に行くことになってしまったのは仕

エンジンをかけた。 夕方になり、自分の車と称している家族兼用の 生ぬるいを通り越し、 アフリ カの 軽 自 砂 動 漠 車 \mathcal{O}

たからいいけど、そういえば、

他に行く人聞いている?」

「みんな引っ越しだったり都合が悪かったり。もうこの辺り

「ああ、ちょうど俺も葬式じゃなくて今日行こうと思ってい

ような熱風がゴーっと吹き出し口からまとまって当たって

「これじゃあ着くまでにも冷えないな」

紅美には車内環境のことは大目に見てもらおうと車を出しお通夜の会場となっている霊園までは、十五分足らずだ。

「今日は他に誰が来るとか知ってる?」

いか?」いかろうから、クラスの方は紅美の方が知っているんじゃないだろうから、クラスの方は紅美の方が知っているんじゃな「当時のバスケ部のメンバー、あとはクラスにいたやつくら

俺は、佐伯先生のクラスになったことはなかった。紅美は、

一・二年の時、佐伯先生のクラスだった。

「クラス、どんな人がいたかな」

俺は適当な返事をしながら、車を走らせた。三年生の卒業クラスとかじゃないと確かに記憶は薄らぐな」三クラスだったかな。今はもっと増えたらしいけど。でも、「薄情だな。そんなに人数多いってわけでもなかっただろ。

だろう。

「たっぱっぱっぱっぱっぱっぱっぱっぱいである。で焼香だけでも随分時間がかかるくの弔問客が予想される。で焼香だけでも随分時間がかかるとは聞いていたが、平日木曜日の夜とあって、駐車場を歩くとは聞いていたが、平日木曜日の夜とあって、駐車場を歩くとは聞いていたが、平日木曜日の夜とあって、駐車場を歩くした。開始の六時まであと十五分ある。直前に来る人が多いだろう。

待つかもしれない。 ようになるだろう。紅美もいるのでクラスの方のやり取りを同窓会状態になるんだろうけど、日を改めてと約束して帰るあとは香典、ご焼香、久しぶりに会う部活のメンバーとは、

と足を速めるまでもなく、隣に着いた。同時に紅美が足を止ていた。喪服のせいか、今度は年相応に見える。追いつこうボタンを押してカギをかけると、紅美は一足先に歩き始め

める。

「どうした?」

「……あれって、伊藤君よね?」

ばない、何かとても軽い気体が集まってできたような人間だに、まるで地面から浮いているように歩いていた。重力が及紅美が指さした先には、細身の男が、足のない幽霊のよう

った。長い前髪が顔を隠しているのが斜め後ろ側からも分かった。長い前髪が顔を隠しているのが斜め後ろ側からも分か

べてみたが、すぐに出てはこなかった。の同級生、近所の伊藤さん等、紅美と共通の知人を思い浮か・ 伊藤,と聞いて思い出すのに時間がかかった。同じ苗字

なかった。かった。もちろん、俺も名前を呼んで振り向かせることもしかった。もちろん、俺も名前を呼んで振り向かせることもしせっかく見つけた一人目の知り合いに、紅美は声をかけな

時に、不良生徒たちの不満のはけ口にされていた。で、クラスからも学年からも煙たがれ、しかとされるのと同紅美が気付いた伊藤、『伊藤奏太』は、いじめられっ子体質

伊藤は二十年近く前、俺たちの学年全体の、いわゆる"タ

-ゲット"だった。

(以下、次号)

地球環境が激変するとき

畑中康郎

私はずっと以前、

宇宙は永遠であると思っていた。

とこ



生み出している。 測されている。まず考えられるのが太陽の膨張だ。 ろが宇宙にもビッグバンという始まりがあったことを知 が消費したエネルギーの総量よりも大きい。 水素を核融合によってヘリウムに変換し、 当然のことながら、 ではないか。 うから、宇宙という存在もかつての無に戻って消滅するの 在していなかったということになる。万物は回帰するとい 体的な時間まで明らかにした。 ッグバンから現在まで約百三十八億年経過していると具 宇宙の消滅よりずっと早く地球そのものが消滅する その考えは変わった。 つまり宇宙も永遠ではないということになる。 地球も永遠ではない。 しかも、 つまり、それ以前は何も存 現代の科学はそのビ

産かな水素の核融合を促進させる。内部の温度はさらに上測されている。まず考えられるのが太陽の膨張だ。太陽はたエネルギーの総量よりも大きい。それほどの規度の核融合を続けることにより、ついに五十億年後には水素のほとんどを使い切ってヘリウムが大勢になる。すると、ヘリウムが高密度になりさらに高温になるため、周辺の残りけつムが高密度になりさらに高温になるため、周辺の残りが消費したエネルギーの総量よりも大きい。それほどの規模の核融合を続けることにより、ついに五十億年後には水素のほとんどを使い切ってヘリウムが大勢になる。すると、ヘリウムが高密度になりさらに高温になるため、周辺の残りに予定が、その環境を激変させる実に様々な原因が科学的に予定がな水素の核融合を促進させる。内部の温度はさらに上値かな水素の核融合を促進させる。内部の温度はさらに上でが、その環境を激変させる実に様々な原因が科学的に予定が、その環境を激変させる実に様々な原因が科学的に予定が、その環境を激変させる実に様々な原因が科学的に予定が、またが、その環境を激変させる。内部の温度はさらに上述が、その環境を激変させる実に様々な原因が科学的に予定が、またが、その環境を激変させる実に様々な原因が科学的に予定が、またが、その環境を表します。

地球上のあらゆる生物は、太陽に飲み込まれるはるか以七十六億年後には地球の軌道に迫るまでの大きさになる。く膨張を始める。膨張は太陽系の水星、金星を飲み込み、昇しその熱がガスを外側に押し出す。このため太陽は大き

たのしば、アルアとのようにはないのようによる。 大がなくなり、地球は死の星と化すというシナリオだ。 後には地球表面の温度は摂氏百五十度に達し、どんな生物 後には地球表面の温度は摂氏百五十度に達し、どんな生物 には地球表面の温度は摂氏百五十度に達し、どんな生物 を注きられない。そして二十八億年後、地表からまったく ないギーは、今後一億年ごとに一%の割合で増加し、十億 がいなくなり、地球は死の星と化すというシナリオだ。 大がなくなり、地球は死の星と化すというシナリオだ。 大がなくなり、地球は死の星と化すというシナリオだ。 大がなくなり、地球は死の星と化すというシナリオだ。 大がなくなり、地球は死の星と化すというシナリオだ。 大がなくなり、地球は死の星と化すというシナリオだ。 大がなくなり、地球は死の星と化すというシナリオだ。 大がなくなり、地球は死の星と化すというシナリオだ。

年ほど先にある恒星だ。 ある。 ば 移動していることが分かった。 1 七万年 二つ目が、 って進んでいるのか、 ていないようにみえる。 ルト 算の結果、 この星は、現在天の川にあって、太陽系から二十光 前に太陽系をかすめたことになる。 の雲であった。 ショルツ星のような天体がもたらすケースで 遠ざかっていることがわかった。 宇宙望遠鏡で見ると、まったく動 あるいは遠ざかっているの しか 問題はこの星が太陽系に向 し観測では秒速八十キロで かすめたのは 逆算すれ か。 軌

オールトの雲とは、太陽系の最も外側にあり、太陽から

飛び去ったと考えられる。そして軌道を乱された小天体は七万年前、ショルツ星はそれら小天体の軌道を乱しながら○. 八光年の距離に雲状に存在する小天体 (岩石) の塊だ。

宇宙空間を漂う存在になった。

る。 \ ` 浮遊惑星はスピッツァー の宇宙空間を漂う浮遊惑星にしないとも限らない。 地球の近傍に現れ、 いくつも発見されている。 れるが、宇宙時間でいえばごくごく最近の出来事なの ったに違い 地球は太陽系の軌道を外れ、宇宙空間を漂う浮遊惑星とな なく地球の近傍を通過したなら、 それなら、ショルツ星がもしもそのときオー ということは、 ない。 七万年とは、 地球を太陽の光や熱の届かない、 いつなんどきショルツ星のような星が 宇宙望遠鏡によってこれまでに 銀河系では何十億個とあるらし 随分遠い 地球はどうなっていたか。 過去のように思わ ルトの 現に、 であ 暗黒

考えると何事もなかったことが僥倖らしい。 となり、死の星になる。地球の年齢、四十五億五千万年を地球が浮遊惑星になれば、地表の温度はマイナス二百度

滅亡が先だ。現在、地球は一万一千年以上も続く温暖な間三つ目が氷河期の到来。これも地球そのものより人類の

ど跡形もなく北半球から消滅させる。 科学の力をもってしても自然の力の前に無力なのだ。 世界になる。 十年後かもしれない 氷期にあるといわ も生物が生きる環境に適さなくなる。 もしも氷河期が到来す いろな原 つなのかについても、 因が考えられているが、 山を削り取り、 れ る。 れば、 氷河期 十万年後かもしれない。 現代の科学でもわかっていない。 北半球は雪と氷に閉ざされた 人類が作った都市や建造物な は何故到来するの はっきりしていない。 勿論、 つまり、 南半球にして 人類はその か、 しかし、 1 ま ろ

秒にすぎない

とだが、 載 の度に大混乱に陥るに違いな が 現在も地球上の大陸は少しずつ動いている。二億五千万年 大天体との衝突であるし、 下に沈み込む。そうなると地中海はなくなって陸続きに せたプレ 現 他にも人類滅亡の要因はいくつもある。 在の形になり、 地球はパンゲアと呼ばれるひとつの大陸だった。 捻じ曲げられたユーラシアは行き場を失って何千メ 級 もしも人類が存続してい \mathcal{O} 山脈を形成するという。 ートがヨーロッパとアジアを載せたプレート また次の一億年後にはアフリカ大陸を 地球自体 れ その :の地殻変動でもある。 ば地殻変動 間 そのひとつが巨 あり得ないこ (大地 それ 震

> その中で人類の生存はその一時間の中 場して午前五時には退場することがわかってい 前中の十二時間に換算すると、 れば百二十億年と推定される。 犯した罪を考えてみる。 さて、 ここで飛躍するが、 地球の 地 複雑な生物は午前四時に 仮に、 寿命は太陽の膨 球の寿命その その百二十億年を午 のたったの千分の ものと人類 . る。 張を考慮 さらに す

の結果、異常気象を常態化させたことになる。
させ、多くの生態系を破壊したうえに温室効果を高め、そる。人類はそのたった二秒の間に地球の環境を著しく悪化る。つまり現時点を一日が終わる午前零時とすると、人類さらに、地球の現時点における年齢を一日に換算してみ

中軍 核開 争いが高じれば核戦争の ば、実につまらない争いを日々、 時代を経験したことがなかった。 滅 そして、人類はそのたった二秒の間でさえ、 事衝突、 発がもたらす紛争、 つつあるが)、 ISとキリスト教国との戦争 さらにはウクライナ問題やシリ 中国の海洋進 危険性も否定できない。 国家間で繰り返している。 現在も宇宙から俯瞰すれ 出が招きつつあ (ISは 戦争の 北朝鮮(T ほ る米 な 問 ぼ 題

滅亡することになる。 がは地球の自然消滅のはるか以前に自らの過ちによって は、放射能によって地球は死の星になる。人類は太陽ある は、放射能によって地球は死の星になる。人類は太陽ある は、放射能によって地球は死の星になる。人類は太陽ある がかいるロシアとアメリカをはじめとする西側諸国との

愚かさだ。勿論、過去何千年の間に地球上にも優れ だけるだろうか。 くの無知で凡庸で罪深い人間、 スターリンなど、残虐非道な人間は極端な例外としても多 は心底情けをかけるものなのだろうか。ユダヤ人を六百万 う考えても小さな存在である。 は何十万人と存在したに違いないし、現在も優れた人物は 人殺戮したヒトラー 存在している。だが、 原罪」を生まれながらに持つ人間をどこまで許していた 何と愚かなことだろう。すべての原因は人類の本来 や二千万人の同胞を死に追いやった 情けないことにほとんどの人間がど そんな人間たちに対し、 キリスト教でいうところの た人物 持 神 0

レーゾン・デートル(存在理由)はあるのか、という素朴生命体である人類が絶滅したら、哲学でいうところの神のそして私は、さらなる問いへと進まざるを得ない。知的

な時間にのみ、存在されるという論理に到達する。ートルはない。すると、神は人類が存続するほんのわずかえると本能で反射的に動く程度の動物に神のレーゾン・デも必要になる。知的レベルの著しく劣った生命体、言い換な疑問だ。意思を持つ人類だからこそ、そこに恩寵も懲罰

年月まで存在される、と私は考えたい。おられるはずだから、宇宙がなくなる気の遠くなるようなないだけなのだ。神はそれら知的生命のすべてを見守ってないだけなのだ。神はそれら知的生命が想像される惑星と存在していると考えられる。知的生命が想像される惑星とだが、大宇宙には地球と同じように知的生命体が無数に

としてもう一度見てみたい。か。まず、地球の最後を他の要因ではなく、物質そのものか。まず、地球の最後を他の要因ではなく、物質そのものそれでは、宇宙がなくなるのはどのくらい遠い未来なの

態になって物質は跡形もなく消滅する。それでは、その膨い、崩壊すると陽電子一個と光子二個に分裂する。その状することが科学的に証明されている。それを陽子崩壊といている。その最小単位が陽子である。陽子は極めて安定し地球を含め、あらゆる物質はさまざまな原子で構成され

大な時間とはどの程度の長さなのか。その所要年数は半減大な時間とはどの程度の長さなのか。その所要年数は半減期として十の三十四乗年以上かかることがわかっている。したがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、陽子崩壊で地球あるいは宇宙がなくなるとしたがって、路子崩壊で地球あるいはどれくらいの年数な判別として十の三十四乗年以上かかることがわかっている。

わるどの時点なのか。残念ながら、無知な私にわかるはずそれでは神がレーゾン・デートルを失うのは、宇宙が終兆年ということになる。ということは宇宙の終わりは最長で十長一半の寿命で最も長いのは赤色矮星らしいが、それでも最

のことらしい。

もない。

しかし勝手な想像をすれば、

多分、

知的生命が宇

レベルで存在できなくなる瞬間であろう。

宙

避けられないことになる。

避けられないことになる。

はいりことは避けるべきであるし、許すべきではない。
ところが、人間という自分本位で自国の国益しか考えられない生き物には、民族・国家を超えて人類全体を思い遣るほどの大きな度量はない。しかし自らの過ちによって滅亡を類が滅ぶのは仕方ない。しかし自らの過ちによって滅亡を類が滅ぶのは仕方ない。

宿場町と共に消ゆ ―第2回―

香 取 淳





ている。
いて、そこで過ごした日々のことが長い年月を超えて蘇っいて、そこで過ごした日々のことが長い年月を超えて蘇っの残像と所々が重なる道筋や家並みが鮮明に焼き付いて戻って数日が過ぎた。しかし、キョシの脳裏には、かつて早州街道金沢宿、その乏しい史跡をめぐる旅から自宅に甲州街道金沢宿、その乏しい史跡をめぐる旅から自宅に

親のように慕い寄っても、 わりを持たず、口を利くこともなかった。幼いキョシが母 には母親代わりになる女性が何人もいて、さびしい思いを に取り残されたキョシは、 けたり。歳が近い兄や姉たちは朝になると登校し、 れ替わりにやってきた兄嫁は、 が遠くの町に嫁いで行き、長兄が嫁を迎え入れた。 前に、状況は大きく変わった。母親代わりをしていた長姉 したことは一度もない。 間をよく行き来した。 こすことが多くなった。 幼児期の彼は、 自宅と本陣問屋であった大きな屋敷と おぼろげな記憶であるが、彼の周囲 しかし、彼が小学校に上がる少し 彼女は無視したり冷たく撥ね付 近くの野原や川べりで一日を過 大勢の小姑たちとは 一切関

やがて彼は、小学校への入学を迎えた。しかし、父は出

_

をして、キョシは満面の笑みを浮かべた。 として、キョシは満面の笑みを浮かべた。 として、キョシは満面の笑みを浮かべた。 として、キョシは満面の笑みを浮かべた。 として、キョシは満面の笑みを浮かべた。 として、キョシは満面の笑みを浮かべた。

を嘗めながら書き始める。
を嘗めながら書き始める。
を書くおうに」と命じた。しかし、周囲の生徒はみな、原稿用紙を中でのでいるキョシ。いうものが存在しなかった。三歳時に死別した母の顔はまいかし、周囲の生徒はみな、原稿用紙を生徒に配って、「今日は、母について作師が、原稿用紙を生徒に配って、「今日は、母について作師が、原稿用紙を生徒に配って、「今日は、母について作いし、周囲の生徒はみな、原稿用紙に向かって鉛筆の芯とで書きながら書き始める。

いいですか」と質問する勇気はなかった。まして、原稿用幼いキョシには、「母はいないので、他の題に変えても

わる間際に、ある出来事に気付いて鉛筆を握った。彼は、何も書けずに思い悩んだ。しかし、作文の時間が終紙を白紙で出す……というようなことは思いもつかない。

『まえに せんだいから ヒラメのひものが おくられてき

ました』

それを命じた無神経な男性教師を心の底から憎んだ。 で母と結びついているに違いない』と推測したのであった。 は自分にも母がいたことと関係があるのでは? どこかいた。しかし、それを知らない彼は、『あのヒラメの干物いた。とれは、意味不明なことを書くことが堪らなく嫌であったし、それ以上に書きたくても書けないテーマと、であったし、それがいたことと関係があるのでは? どこかであったし、それは、意味不明なことであるが、母の生家が仙台のそれは、長じて知ったことであるが、母の生家が仙台の

出て行った。 出て行った。 はみな、高校を卒業すると古びた大きな家をが、長男以外は家に留まることはできない。キョシの家でが、長男以外は家に留まることはできない。キョシの家で家を出て行く。耕作地が乏しい農村では自然なことである家と出て行った。

やがて、兄夫婦に二番目の子が生まれ、住み慣れた家の

ように一切口を出さなくなった。台所を取り仕切るのは兄嫁で、キヨシの父は隠居したかの中心は幼い甥たちと兄夫婦に移っていく。月々の家計や

いうような疑問が沸々と湧いてきた。
いうような疑問が沸々と湧いてきた。
それまでは考えたれた境遇を強く意識するようになった。それまでは考えたこともなかったが、『何故、自分はこの世に生まれてきたこともなかったが、『何故、自分はこの世に生まれてきたのか?』、『音いのかも知れないが、彼は、自分と自分が置かいうような疑問が沸々と湧いてきた。

は重く、 キヨシは、 みどころのない疑問は頭から離れない。 占められていた。 あった。 んやり眺めていた。 その日は、二学期が始まって二週目の、よく晴 の男性教師が胸を張って教室に入ってきた。それでも 鞄から教科書を取り出す気力もなく、ただ窓の外を キヨシは、 頭の中は『人は何故……』という何時 授業を受けようという気持ちにはまったくなれ 教室に入り、 何時ものように家を出たものの足取 自分の机に座ってもその掴 始業のベルが鳴り、 いもの疑 れ た日 簡で で

「キョシ、外に出ろ!」

『何故自分は……』という厄介で掴みどころのない疑問がと感じても、罪悪感や羞恥心は一切湧かない。それ以上にら廊下に出た。頭のどこかで先生が怒るのは当たり前……その怒声で彼は立ち上がり、殴られることを覚悟しなが

頭の中に満ち満ちていた。

たすら待った。

「英語の教師は無言のままキョシを職員室に連れて行き、英語の教師は無言のまままもした。との言葉が、彼の虚ろな心に響くわけはない。キーの教師は、静かな声でいろいろなことを話し掛けてくる。 担 英語の教師は無言のままキョシを職員室に連れて行き、

けないということを骨の髄まで染み込ませた。家の中ではもちろん、教師や友人の前でも表に出してはいその一件があってから、キョシは自分の悩みや苦しみを

たり。その夜その夜の遊びを編み出して、夜更けまで家にで民家の庭にある李や梨の実を荒らしたり、女風呂を覗い夕食が済むとすぐに家を飛び出す。自転車のペダルを踏んを境に大きく変わった。キョシは家にいることが嫌になり、子供らしく生真面目であった日々の暮らしが、そのとき

帰らない。

玉

奥に進むと、 に目覚めた。 氷雪に覆われる。もちろん、 大寒の頃には零下二十度近くまで冷え込み、地表はすべて かし、 その厳しい冬の 寒い冬がくると野外での夜遊びはできなくなる。 村の公民館がある。 本陣問屋の向かい のあいだ、 自転車を走らせることも不可 彼は小説を読むことの 側の 彼は、 小路を百メートル その建物の一角に が面白さ ほど

小さな図書室を見つけ出した。そして、 人気のない書庫に

す仲間に混じって勉強に取り組む。

入り込み、 面白そうな本の背表紙を眺める。

その次は『赤と黒』、さらに『女の一生』等々。 のである さや苦しみを忘れ夢中になれる小説が、 も中学生には早過ぎるが、 放な男と女の情交が十組も繋がる『輪舞』もある。 がら、二、三日で読み終えた。次に借りてきたのは『椿姫』、 み』。タイトルが、彼自身の抱いていることと一致してい クなストーリーと官能的な描写に魅力があった。 最初に目に飛び込んできたのは、『若きウェルテル 興味をそそられたその一冊を、 キョシにとってはドラマティッ 彼は炬燵に足を入れな 彼の救いになった 中には奔 日 いずれ Þ · の 憂 の悩

> ない。 さず聞いていたので、 果は目標からかけ離れてゆくばかり。それでも授業は欠か 制服や学帽もない自由な校風も気に入り、彼は大学を目指 験のように全教科が満点かそれ近くを……と願っても の小説を読み耽る毎日では勉強をする時間はまったく 春から秋にかけては夜遊びの連続、 当然、 学校での成績は悪化の一途。 高校は希望した進学校に何とか合格 厳寒の冬になると外 中一の 最初の試

作って、 び込み、食事や用事のあるときに鳴らす『呼び鈴』を自ら 恐らく、 であろう。キョシは喜んで机や教材、寝具などを離れ 部屋と、備え付けのベッドを手造りしてくれたのである。 ヨシの居場所をこしらえた。 つて大工の仕事場にしていた平屋の隅に二坪ほどの勉強 無口で、キョシと話すことは滅多にない父が、 母屋と離れの間に電線を張り巡らせた。 兄夫婦の家族と一緒にいては……と思ってのこと 他界したキョシの祖父が、 離 れ カュ +

った。 や勉強の合間には何度 しかし、キョシと父の試みは、 勉強と就寝時には離れ も母屋に戻ってくる 0 小部屋で過ごせても、 目論見通りには運ばなか

る梅 雨時の午 後 離 れ . (7) 小部屋を出たキョ ーシは 母屋に

その彼女に、キョシは何気なく声を掛ける。良仕事から戻って来て、無言で夕食の準備に取り掛かった。繋がった居間で茶を淹れて一口啜った。そこに兄嫁が、野向かった。下校時にずぶ濡れになった服を着替え、台所と

「今日は、ひどい降りだね」

んたの面倒なんか見なければならんのかね!」ちは朝からびしょ濡れで野良仕事だよ! なんで、私があ「ふん、あんたは家の中でのうのうとしているけど、こっ

悲しみが襲ってきた。気持ちは跡かたもなく吹き飛んで、言いようのない怒りとだ。数分前までの「来週の試験に向けて頑張るぞ」という上がる。そして、離れの小部屋に駆け込み、頭を抱え込ん上がる。

も考えた。

ね、あんたに買ってやる金など一銭もないよ」とたっぷりむ思いでそれらを切り出す。「家にはそんな余裕はないの下ではむずかしい。加えて汽車通学の定期券が切れる直の下ではむずかしい。加えて汽車通学の定期券が切れる直を利かない……とは思っても、それは一つ屋根シはひどく傷つく。彼女とはできるだけ会わない、たとえりないらの冷たい言葉は絶え間なく続き、その度にキョ

嫌味を言われて、やっと必要な金を手に入れた。

兄弟のキョジサのように医学部に進んで、医師になることにすった。、一説が好きで国語の成績も悪くはなかったので、ヨシは、小説が好きで国語の成績も悪くはなかったので、ヨシは、小説が好きで国語の成績も悪くはなかったので、おろそろ受験する大学や学部を考える時期がやってくる。キという気持を失わなかった。高二の夏休みが明けると、それでも彼は、「勉強に集中して、少しでもよい成績を……」、んをかき乱され、泣くことの多い毎日ではあったが、それでも彼は、「勉強に集中して、少しでもよい成績を……」

しつけに言った。

吸っていた。そこにやってきた兄嫁が、彼を見下ろしてぶ屋を出た。キョシは急須に湯を注ぎ、テーブルで熱い茶を屋を出た。キョシは急須に湯を注ぎ、テーブルで熱い茶を減然とした将来を夢見ながら、彼は目前に迫った中間テ

い女だったそうだけどね」いう人も髪の毛が赤かったそうだよ。まあ、後妻で品のな「髪の毛がすこし茶色になってきたねぇ。あんたの母親と

ヨシを打ちのめした。彼はその場にいたたまれず、離れのその言葉は、重機から振り落とされる鉄の玉のようにキ

両頬を伝い続けた。 小部屋に駆け込む。涙がどっと溢れて、それは何時までも

や近所の大人から何度も何度も聞かされてきたが、そのた亡母の悪口に晒されるのは初めてのことではない。親戚

びにキョシは思った。

ない女性であった」と胸を張って生きられるのに……。「僕にとって、どこの誰よりもいい母であり、かけがえのし長く。そうすれば、必ず母の良いところを思い浮かべ、し長く生きていて欲しかった。僕の記憶に残るだけもう少け長く生きていて欲しかった。僕の記憶に残るだけもう少しだ――母の死は仕方がないことだけど、せめてもう少しだ

に満ちた忌まわしい言葉を浴びせ掛けられた。みと劣等感にじっと耐えてきたが、今また、兄嫁から悪意のないもののように思えてくる。幼時からそのような悲しきず、そのような女を母に持つ自分もまた惨めで存在価値なかった。周囲の悪口が作り出す惨めな女しかイメージでしかし、いくら嘆いてみてもキョシの中には母が存在ししかし、いくら嘆いてみてもキョシの中には母が存在し

――もう無理だ! こんな家では暮せない。

書き始める。その文面は、兄嫁から邪魔者扱いされる毎日そして、東京でクリーニング店を営む次兄に宛てて手紙を頬に残った涙を拳で拭って、キョシは机に便箋を広げた。

時制高校に通いたい……というものであった。くことも嫌になってくる。ついては兄の店で昼間働き、定にはもう耐えられない。勉強も手につかないし、生きてい

次兄は自宅近くの喫茶店のドアを押して、キョシと向き製の出札口に次兄が立っていて、彼を暖かく出迎えた。の時から一人で上京しているので、兄の家までの道順はよの時から一人で上京しているので、兄の家までの道順はよかく一度上京しなさい、そこでゆっくり話そう」と記されかく一度上京しなさい、そこでゆっくり話そう」と記されかりでは自宅近くの喫茶店のドアを押して、キョシと向き製の出札口に次兄が立っている。まな場合に、次兄から封書が届いた。封を切ると、「とに数日後に、次兄から封書が届いた。封を切ると、「とに

はないぞ」
分かるな。それに母親がいたところで、良いことばかりでかみさんに、お前の母親代わりが務まる筈はない、それは「キョシなあ、ウチに来たって何も変わらないぞ。ウチの

続けた。 兄はブラックのコーヒーを啜りながら、落ち着いた声で

に駄目だと。仕方がなく人吉の海軍兵学校に入って過酷な親父や学校の先生は認めてくれたが、おふくろだけは絶対「俺だって勉強をしたかったが、おふくろが反対してな、

合って座った。

軍事訓練の連続さ」

「どうして?」

「先妻の子が進学してないのに、お前だけ行かせるわけに

はいかない、というわけさ」

ーフーン

って仕方がないだろう。それより将来のことを考えてみろ「キョシ、死んだおふくろや兄嫁のことなんか考えていた

去っていた。

次の言葉を待った。

俺はなぁ、

商船大がいいと思うよ。

船に乗って広々とし

次兄の話には妙な説得力があった。キョシは無言で頷き、

う。勉強して商船大学に入ったらどうだ」 た海を眺めていたら、この世の憂さなんて吹き飛んでしま

「船乗りねぇー、でも俺は泳げないよ」

「な―に、大学に入ったら、とことん鍛えられるさ」

が動くまでホームで見送った。
多忙を極めていたが、キョシを新宿駅まで送り届け、汽車家に泊まり、翌日郷里に帰ることになった。次兄は商売で響きがあった。少し気が晴れたキョシは、その晩は次兄の終戦後に長らく船員をしていた兄の言葉には頼もしい

る場所がない」とか「死ぬ」という考えは頭の中から消えに乗った。しかし、次兄と二人だけで話すうちに、「生きなってしまうから、死ぬしかないな……と思いながら汽車は家には戻らないつもりでいた。多分、生きる場所がなくキョシは郷里を発つとき、次兄との話が決裂したときに

かり失い、長い時間、出口のない思索にのめり込んだ。てきた。そして、離れの小部屋に入り込み、「船乗りになって、世界中を航海して歩くのも悪くはないな」などと思って、世界中を航海して歩くのも悪くはないな」などと思って、世界中を航海して歩くのも悪くはないな」などと思って、世界中を航海して歩くのも悪くはないな」などと思って、世界中を航海して歩くのも悪くはないな」などと思ってはみるが、そのまま勉強に向かう気持にはなれない。自分自身を覆っているばかり。彼は、勉強をする気をすった。

に辿り着いた。 うちに、彼は逃げること、現実から目を背けるという考え人はいかに生きるべきか? その問いを何度も繰り返す『前には進めず、さりとて死ぬことも叶わず』となれば、

るか、無理をして突き進もうとすれば、かえってその身を――一歩も前に進めなくなった人間は引き返すか逃げ

方になる……。 滅ぼす。時と場合によっては、『逃避』もまた立派な生き

兄に宛てて手紙を書く。
の辛さを忘れた。しかし、すぐに上京した折に次兄から貰ウイスキーとタバコを買い込み、それらの力を借りて現実の辛さを忘れた。しかし、すぐに上京した折に次兄から貰めてスキーとタバコを買い込み、それらの力を借りて現実の音過や勉強のこと、将来のそう開き直って、彼は自分の境遇や勉強のこと、将来の

「針の筵のような日々を送っているが、とくに金が要ると

きた。

貸して欲しい。将来、働くようになったら必ず返済するかそこで話の分かる兄貴へのお願いであるが、月に三千円をきが一番辛い。とても、兄嫁に頼む気持ちにはなれない。

んだのである。
相談すれば、きっとこの話は聞いて貰える……、と彼は踏犯して補導されたことがある。そのような経歴がある兄にその兄は若いころ、村の倉庫から米を窃盗したという罪を三番目の兄も、都内でクリーニング店を経営していた。

彼の策略は功を奏し、キョシは高校生としては破格の小

トランプで遊んだり。ときには小部屋を抜け出して、果樹い込む。そして、毎晩遅くまで酒を飲みながら騒いだり、などを存分に買い込み、近所に住む友を二人、小部屋に誘遣いを手に入れた。その金でウイスキーのボトルやタバコ

園を荒らし回ったりする悪さの繰り返し。

科目ともに七五分と長かったので、ぐっすり眠ることがでいて授業が始まると、机に俯せになって眠った。授業は全ろむ。そして朝の七時に家を出て、汽車で登校。高校に着キョシは夜中の二時か三時に友と別れ、朝まで少しまど

春になると、彼の行動は次第に大胆になっていく。入学時からの鞄が邪魔になるので、彼は教科書の閉じ糸を切った。その週に使う頁だけを選び取る。四科目分を重ねてもまる。その筒状に丸めた教科書を開いて授業に臨み、放課まる。その筒状に丸めた教科書を開いて授業に臨み、放課まる。その筒状に丸めた教科書を開いて授業に臨み、放課まる。その筒状に丸めた教科書を開いて授業に臨み、放課まる。その間に使う頁だけを選び取る。四科目分を重ねてもで、その週に使う頁だけを選び取る。四科目分を重ねてもで、その週になっていく。入学をは、またなると、彼の行動は次第に大胆になっていく。入学で過ごした。

で、彼の性格は行動的に変わっていく。昼休みに派手なカそのような暮らしは以前の抑圧された日々より気が楽

見学。 ボールをキャッチする術を知らずに、ひたすら逃げ回るだ 動能力は簡単に取り戻せない。ドッヂボールの時間などは、 校に入って三年間は肺 ンドを超えて草深い土手に突き刺さる。彼は、 狙いをライト方向に変えて流し打つと、ボールは狭い 気味にアウトハイの玉しか投げてこない。そこでキョシは しむチームに割り込んで、バットを振るとボールはセンタ ラーシャツ姿でグランドに出る。 ークされるような力が自分にあることに内心驚いた。 \mathcal{O} 頭を軽々と越えた。次の打席では、ピッチャー 四年生からそれは解禁となったが、発達が遅れた運 結核のために体育の時間はすべて そこでソフトボール 相手からマ - は敬遠 小学 ・グラ を楽

入ったものを好きなだけ選び取り、 で長期間客が引取りに来ない洋服の中から、 と気付いたのである。 を薄らげ、 んに手に入る。 わなくなった。小遣いにも不自由はなく、着る服もふんだ 運動はダメで能力がない」と自ら決めつけていたためだ ソフトボールで強打者となった体験は、 元気づけた。 それというのは、 家出を画策して以来、兄嫁も何も言 幼時から体育が苦手だったのは、 兄たちのクリーニング店 持ち帰っていた。 キョシの劣等感 キョシは気に

宅後は離れの小部屋で夜更けまで酒盛りをする毎日。たくって登校する。そして、放課後は街中に繰り出し、帰彼の服装はますます派手になり、髪にはポマードを塗り

にジーンズ、髪にはポマードといういで立ちである。にジーンズ、髪にはポマードといういで立ちである。に小部屋を出たキョシが顔を出した。派手なアロハシャツ帰りをしていた。その姉と兄嫁が居間で話しているところ 初夏のある日、都内に嫁いでいた二番目の姉が久々に里

を無視して急須に茶葉を入れて湯を注ぐ。がが、大声で叫ぶように叱った。しかし、彼は姉「キョシ!」その格好で高校生なの!」

いけど……、お義姉さん、そうですよね?」「それに、お酒を飲んだりタバコを吸ったりしているらし

けであった。

「ええ、毎晩遅くまで……」

「・・・・・・・タバコだって駄目に決まっているでしょ。一体、キョシは「だいたい高校生が毎晩お酒を飲むなんておかしいわよ。

た。その太々しい態度に呆れて、姉の激しい言葉を無視して、よ何を考えているの!」

キヨ

シはゆっくり

茶を啜

姉は隣室にいた父に声を

掛ける。

の怒声

く叱って下さい」 「お父さん、キョシはひど過ぎます。お父さんからも厳し

半開きの障子を隔てて、新聞を読んでいた父が口を開い

とを言うんじゃない」ことをよく解かった上でやっていることだから、余計なこ「お前たち女は黙っていろ!」キョシは賢い子だ。自分の

いだ考えた。いたぎえた。とを繰り返し思い浮かべて長いあいま居間で起こったことを繰り返し思い浮かべて長いあ人は沈黙し、キョシも黙って小部屋に引き上げる。そして、父は、逆に姉たち二人を強くたしなめた。その言葉に二

ゼミナールに通った。しかし、一年近くも授業や勉強からつく。そして夏休みに入ると上京して、受験生向けの夏季た生活を立て直すため、彼は一旦家から離れることを思い父の一言で、キョシは心を入れ替えた。それまでの乱れ

ばない。初めて体験する東京の蒸し暑さも身に応えて、講遠ざかっていたので、予備校の講義にはまったくついてい

を消した。彼は、秋の夜長を懸命に机に向かい、大幅に遅ーのボトルやタバコは消えてなくなり、出入りする友も姿に軌道に乗り始めた。もちろん、彼の小部屋からウイスキ表が始まるとすぐに瞼が重くなった。

れていた受験勉強の挽回に取り組んだ。

できない。そこで彼は、 決め込んでいた時期と重なり、 う。仕方がなく理系を目指すことにしたが、彼は物理がま 住む兄たちは口を揃えて反対。「文学部は女子が行くとこ ったくできない。 ろだよ、卒業後の就職はなく食ってはいけない」などと言 める。彼は国語が得意で文学部に興味があったが、 ときおり受験雑誌のページを開いて全国の大学一覧を眺 毛布を巻き、さらに熱い茶を飲みながら寒さをしのいだ。 とつでは暖が取れない。 に差し掛かった。離れの小部屋は寒くて、石油ストーブひ やがて木々が赤や黄色に色づき枯葉が舞い、冬の入り口 授業には出席したものの、 理系でも生物と化学で受験できる 彼は分厚い綿入れを着込み、 基本的な用語の意味が理解 終始居眠りを 都内に

医歯薬系と農学や水産に的を絞り始めた。

違い た町に行って、そこですべてをリセットする。嫌いな自分 ことが煩わしい。そうであれば、 ことや複雑な家庭環境など、 常に周囲から意見されたり干渉されたり。さらに、 内の大学は、 とそれを育んだ暗い過去をすべて忘れ、 が良さそうに思える。東京や郷里からできるだけ遠く離 の考えは年を越えて大寒を迎える頃に大きく変わった。 ング店の仕事を手伝えば小遣いも稼げる……。 兄の家から大学に通えば、 い自分』を一から造り直そう……と考えたのである。 新世界で新しい自分に生まれ変わる。そこで、『望まし 大学の場所については、 ない。 進路に関し、文学部は駄目だと言われたように 通学に便利ではあっても窮屈な思いをするに 住居の心配はないし、 最初から都内を考えていた。 暗い 大学は遠くに行ったほう . 過去を引きずって生きる 誰も知る人がいな しかし、 クリー 亡母の 都 そ 次 n =

は、体に限らず心までも凍てつくような寒さである。キョことが生活の知恵になっていた。隙間が多い離れの小部屋瓶の中に細長いブリキ缶を入れて、その缶に生け花を挿すめ、水を張った花瓶などは割れてしまう。そこで人々は花

淹れた。その熱い茶で体を内側から暖めながら受験雑誌のき寄せ、ストーブに載せた薬缶から絶えず湯を汲んで茶をシは橙色の炎が燃え盛るストーブを膝のすぐ近くまで引

ージを繰る

「長崎」という二つの文字が飛び込んできた。南国のロマンに満ちた町はないものか……という彼の目彼は受験雑誌の巻末に近い九州を重点的に探した。暖かいできるだけ遠くといっても、寒い北海道や東北には心ができるだけ遠くといっても、寒い北海道や東北には心が

「ここがいい、この町に行きたい!」

この ほぼ もしばらく収入はないと聞く。 化学が百点ずつ、英・国・社会がそれぞれ百点で計七百点。 キョシの家では医学部に進むのは経済的にも無理がある。 かる。従兄のキョジサやその弟も医師になったが、 水産学部。しかし、 を調べ始めた。理系で物理なしで受験できるのは医歯薬と 小声で叫ぶと、 配点であれば合格の可能性は十分にある、 同 数.....。 薬学はどうであろうか? 試 彼はその地にある大学の学部と試 験科目と配点は、 医学部は難しいし、卒業まで六年も 国立とはいっても、 定員四〇人で男女比 数学が二百点に生物と 苦手の 験科 英語

の穴は生物と化学で満点近くを取れば埋められる……。

しても合格したい……。 酷い寒さに身を縮め机上に開いた受験雑誌の一頁、そこ でまったく新しい自分に生まれ変わる、そのために何と がな女子学生も一杯いる。彼の心は一瞬のうちに決ま な。そして、そこに印された大学は、日本で最古の伝統― ないた。この長崎にある大学に進み、暖かくロマンに満ちた で、この長崎にある大学に進み、暖かくロマンに満ちた がな女子学生も一杯いる。彼の心は一瞬のうちに決ま がた。この長崎にある大学に進み、暖かくロマンに満ちた で、この長崎にある大学に進み、暖かくロマンに満ちた で、この長崎にある大学に進み、暖かくロマンに満ちた で、この長崎にある大学に進み、暖かくロマンに満ちた で、このために感じられ といものに感じられ

変えて一心不乱に取り組んだ。への集中度は一段と高まり、重点も直前対策の暗記科目に受験雑誌の頁を閉じて、キョシは再び机に向かう。勉強

「大学、合格したみたいだ」
「大学、合格したみたいだ」
「大学、合格したみたいだ」
「大学、合格したみたいだ」

「ふんッ、こっちには関係ないことだね!」

せた。

せた。

思いもよらぬ言葉が返ってきた。その辛らつな言葉にキー思いもよらぬ言葉が返ってきた。その辛らつな言葉にキーといった。

=

である。
大学に合格したキョシは、離れの小部屋を整理して入学に備えた。もうこの部屋に住む人もいなくなるのかと思うのと妙に名残惜しい。送り出す寝具や身の回りの品が揃い、あとは汽車の切符を……という段階になって、突然、父があとは汽車の切符を……という段階になって、突然、父があとは汽車の切符を……という段階になって、突然、父がある。

「ヒデって、ヒデサ叔父さんのこと?」

ヘン、英賢だよ。長女のクミコが長崎にいるから、一度

会っておきたい」

で詳しく聞けるに違いない。
に、幼い時から繰り返し耳にしてきたヒデサのことも車中るのに、そこに従姉がいるとは……。しかし、見ず知らずがいない町、高校の同窓生の中でも最も南の大学に進学すがいない町、高校の同窓生の中でも最も南の大学に進学すがいない。
はいもよらぬ言葉に、キョシは驚いた。南国の誰も知人

席に父と向き合い、 ボックス席の背もたれも硬い木製。 りがザラつく。窓を閉めていてもそれは容赦なく舞い込ん 恰好よく見えるが乗り心地は決して良いとは言えない。 と共に吐き出される煤塵―細かい石炭殻―で窓枠や手す 旅である。汽笛を鳴らして煙を棚引かせるSL列車は一見 そこから長崎行きの急行に乗り換えた。 て中核となる情報を聞き出した。 |月の第| 顔や鼻腔を黒く染める。二人ずつ向き合って座る 週にキョシと父は中央西線で名古屋に出 キョシは波乱に満ちた叔 その乗り心地の悪 一昼夜にも及ぶ長 父の生き様に い座 て、 煙

となった。

身は蔵前の高等工業学校というから、現在の東工大の前身叔父のヒデサは父と三歳違いで、造園技師であった。出

伸びる緑地帯であるが、 められる。 カコ の復興事業は、 市の復興事業の一つとして、 東京スカイツリーと浅草寺の間を結ぶ言問 を卒業後、 れ、 幹線道路の拡幅と避難場所にもなる公園の確 最初は隅田公園の設計に当たった。 主要な公園については、 延焼を食い止める防火帯の設置に重点が 関東大震災で焼野原と化した東京 政府主導で整備された。 当時の復興局公園課 橋の下に長く 隅田 公園 保が 当時 は "雷 准

と旧水戸藩邸の庭園を取り込み、和洋折衷の大規模な公園その中でも隅田公園は、江戸時代からの名所であった桜堤折下吉延らにより、浜町公園、錦糸公園と共に整備され、

を進め、 地域における防災都市のシンボルとしたというのである。 大公園と小学校に付随するおびただしい数の公園により 公園課は、 したが、 関東大震災は大正十二年(一九二三)の九月一日に勃発 政府の復興事業と並行して、 このときヒデサは十八歳で蔵前にあ 防火帯と避難場所の役割をもたせた。 小学校の不燃化と共に近くに小さな公園 井下清が率いる東京市いのしたきよし 0 政府による た東京高等 0 増 設

だのであった。

「大学校の学生。しかし、彼の生家はありふれた大工で、工業学校の学生。しかし、彼の生家はありふれた大工で、工業学校の学生。しかし、彼の生家はありふれた大工で、工業学校の学生。しかし、彼の生家はありふれた大工で、工業学校の学生。しかし、彼の生家はありふれた大工で、

った。

浜町に辿り着く。

その隅田公園が開園したのは昭和六年(一九三一)であるいの、震災から八年後のことになる。日本の最西端、ある公園の設計に当たったヒデサは、その功績が折下吉延長崎の雲仙公園の設計と造営であった。彼は、自ら設計した隅田公園の完成と開園を待つことになる。日本の最西端、ある公園の設計に当たったヒデサは、その功績が折下吉延とになる。母校のすぐ近くにるから、震災から八年後のことになる。母校のすぐ近くにるから、震災から八年後のことになる。母校のすぐ近くにるから、震災から八年後のことになる。日本の最西端、

ろくに育たない信州の寒村とは比べようもない。その地でがふんだんに湧くこの町は、寒さが厳しくて米や農作物もむ風光明美な土地である。豊かな山海の幸に恵まれ、温泉小浜は雲仙の最高峰である普賢岳の麓にあり、橘湾を臨

てきたという自信と誇りに、何ものをも恐れない若さがあ大きな仕事をやり遂げ、政府の有力者から推薦されてやっ大きくて頑強、酒もめっぽう強かった。東京で震災復興の新たな仕事に就いたヒデサは精力的に働く。身体も人一倍

和七年(一九三二)に当時の満鉄理事兼満鉄経済調査会長長春、上海、青島などの都市計画に参画したのである。昭の嘱託となり、終戦まで大連に居をかまえ、大連をはじめ頭に再び新たな仕事が舞い込んでくる。ヒデサの腕を高く雲仙公園の設計が順調に進んで、造園作業が軌道に乗る

ことである。 の仕 近代的な都市建設を進めようという誘い サのもとに一通の手紙が届く。 遠 大連に向けて旅立った。 に従って中国大陸のあちらこちらに大規模な都市型の公 十河信二に招か 「を設計していった。 |事が一段落したヒデサは快諾して、 彼は妻と娘を連れて大連に赴き、 れての異動であった。 長女のクミコが二歳になった年の 文面は、 満州に来て大陸に その折下からヒデ 小躍りするように であった。 折下の 雲仙で 指示

と合併させられ廃業となってい 処ができるまでの間 は戦時中の政府の方針により、 所であった建物に住むことになる。 時もそうであったが、ヒデサにとって姉が最も頼りになっ あった屋敷に嫁いだ姉を訪ねる。 人と女児一人を伴って。ヒデサはまず、かつて本陣問 村に引き上げてきた。妻と十五歳のクミコを筆頭に男児二 第二次大戦の終了と共に、 その結果、ヒデサとその家族六人はマルキョー ヒデサとその家族は実家の奥座 ヒデサは満州から郷里の金沢 上諏訪にある大規模な工場 たのである。 東京の高等学校に進んだ マルキョ その新し 1 の製糸工場 -の事務 一敷で い住 屋で

事務所の改築は容易いことで、瞬く間にそこは簡素な住宅工仕事を手伝っていて腕には覚えがある。空き家となったに他界したものの、キョシの父とヒデサは子供の頃から大に他界したものの、キョシの父とヒデサは子供の頃から大具はすべて揃っている。小さな家であればすぐにでも建て具はすべて揃っている。小さな家であればすぐにでも建て

通い始めた。
らクミコは女学校に、十歳の弟と八歳になる妹は小学校に、外ずぎる。ヒデサたちは完成した新居に移り住み、そこか狭すぎる。ヒデサたちは完成した新居に移り住み、そこか生家の奥座敷は十二畳あったが家族六人で暮らすには

に姿を変えた。

『火の山』という地名は、かつて山頂に敵の襲来を都に知界の下関、その地に開設される火の山公園の整備である。の手紙が届く。それは、彼が折下に宛てて送った手紙の返生活の場を確保したヒデサのもとに、しばらくして一通

高 が見渡せる要衝 らせるための狼煙台が設けられていたことに由来する。 二六八メートル \mathcal{O} 地 \mathcal{O} 山頂 で、 明治二三年 から瀬戸内海、 八九〇) 関門海峡、 には 日 -本海 山 標

ころである。後に開放されるまでは民間人の入山が禁じられていたとに砲台が置かれた。それ以降、重要な軍事拠点となり、戦

に新任地に旅立っていった。

こ新任地に旅立っていった。

と、その仕事を遂行するために家族で住める家も見つかった、その仕事を遂行するために家族で住める家も見つかっと、その仕事を遂行するために家族で住める家も見つかっと、その仕事を遂行するために家族で住める家も見つかっと、その下関に単身で赴任したヒデサはしばらくして郷里

の広場に誘う。

で行く手は遮られている。それが最果ての地というものかいれれた髪を整える。右側の車窓に真っ青な海が見えてきい乱れた髪を整える。右側の車窓に真っ青な海が見えてきい乱れた髪を整える。右側の車窓に真っ青な海が見えてきい乱れた髪を整える。右側の車窓に真っ青な海が見えてきい乱れた髪を整える。右側の車窓に真っ青な海が見えてきい乱れた髪を整える。右側の車窓に真っ青な海が見えてきい乱れた髪を整える。右側の車窓に真っ青な海が見えてきい乱れた髪を整える。右側の車窓に真っ青な海が見えてきいれた髪を整える。右側の車窓に真っ青な海が見えてきる。

疲れたでしょう」と声を掛けながらキョシたち二人を駅前ョシには中年のおばさんのように見えた。彼女は「長旅であった。年齢は三十二、三歳とのことであるが、若いキんですね」と声を掛けた。父が無言で頷く。彼女がクミコと妙な感慨を抱きながら、二人は出札口を通り抜けた。

ミコは で、 車は、 5 うぞ」と声を掛ける。 見えない。緩やかに曲がった路地を中ほどまで進むと、ク こは酔客が二人か三人並べば塞がってしまうほどの道 ら降りて、クミコの後について細い路地に入って行く。 で」と行先を告げる。 の広さで小さなキッチンがついている。 い階段を駆け上がった。 るように二階にも出窓や物干し台が連なり、 一行はタクシーに乗り込み、クミコが 父が先に急な階段をゆっくり昇った。二階は六畳ほど 両側に飲食店が隙間なく並んでいる。 歓楽街の入り口近くで停まった。キョシたちは車か 「ここが私の家、 その思案橋の手前の信号を右折した 父とはキョシは互に顔を見合せなが そして、階段の上から「さあ、 狭いところですけど」と言って狭 その狭い家にはク 「思案橋 店舗に圧し掛か 空はほとんど の近くま

でいるのだという。はクミコより七歳年下で、大工の夫と結婚して近くに住んミコの妹が先に来ていて、来客の準備をしていた。その妹

妹が座った。 狭い部屋の小さな卓袱台を挟んで、キョシたち親子と姉

んの手紙は本当なんだって納得したの」わよ。そしたらキョシ君の名前が載っていたから、伯父さして嘘じゃないかと思って、古い新聞を取り出して探した「伯父さんから手紙を貰ってびっくりしたわ!」もしか

に満ちた言葉であった。 それが会話の始まり、クミコの部屋で最初に聞く猜疑心

き取った。

の時だったかな?」「クミコがヒデの遺骨を抱えて信州に来たのは、十六か七

「ええ。あれは十六歳の秋のことです」

「確か、弟が一緒だったなあ」

「そう、四つ年下のヒサシと二人で……」

のあらましは、おおよそ次のようなものである。 辛い思い出話のためか、二人の声はくぐもっていた。

そ

クミコたちの父、ヒデサは下関の火の山公園の仕事が軌

すうちに脳出血が再発し、翌日避難した知人の家で息を引いて、とデサは布団から飛び起きる。そして、幼い子供たちにも追ってきた。夕暮れ時に「火事だ!」と言う声を聞いて、とデサは布団から飛び起きる。そして、幼い子供たちの家が連を外に運び出す。不自由な体でそれを何度か繰り返財道具を外に運び出す。不自由な体でそれを何度か繰り返財が直を外に運び出す。不自由な体でそれを何度か繰り返すうちに脳出血が再発し、翌日避難した知人の家で息を引いて、とデサは布団から飛び起きる。そして、幼い子供たちで表のシズエに預け、自らは病気のことも忘れて家具や家と関連を表し、というに関係できる状態がある。

選択する余地などまったくなかった。

選択する余地などまったくなかった。

選択する余地などまったくなかった。

選択する余地などまったくなかった。

選択する余地などまったくなかった。

らなければ……という一念からであった。 に呼び寄せた。もうすぐ妙齢を迎える妹を獣のような義父に呼び寄せた。もうすぐ妙齢を迎える妹を獣のような義父ばらくして経済的な自立を果たすと七歳年下の妹を長崎崎の歓楽街に出て、水商売の道に入っていく。彼女は、し

暮らせないと家を飛び出した。そして、定職もないまま長

彼女たちが凄まじい境遇の中を生き抜いてきたことが伝も曖昧であった。しかしキョシは、重苦しい会話の中からコとその妹も辛い思い出ばかりで言葉の数は少なく、しかキョシの父は元々無口で多くを話そうとはしない。クミ

わってきた。

突然、クミコが明るく弾んだ声でキョシに訊いた。「ところでキョシ君、住むところは決まっているの?」

「いえ、まだです」

みるわね。キョシ君は確か薬学部だったわよね、というこ「そう、それじゃ店によく来る大学生のお客さんに頼んで

とは・・・・・」

器を置いた。回す。すぐに相手が出て、彼女は用件を手短に話して受話回す。すぐに相手が出て、彼女は用件を手短に話して受話を女は小さな手帳を開いて、脇にある電話のダイアルを

るのよ」
「私のお店には学生さんがいっぱい来るから、

いて、キョシは立ち上がった。宿が見つかったという。その住所と電話番号を彼女から聞彼女が得意気に話すうちに電話のベルが鳴り、手頃な下

っしゃい」お酒が飲みたくなったときはね、何時でも下のお店にいら「住むところが決まったら私にも連絡するのよ。それから

「有難うございます。よろしくお願いします」

キョシは頭を深く下げて狭い部屋を出た。そして、下宿

何でも頼め

表示された停留所から路面電車に乗り込んだ。の住所と電話番号が書かれたメモを手に、『観光通り』と

しに高揚した。 クミコの紹介で落ち着いた先は大学生が十人余り寄宿 が正された境遇からの全面的な解放。キョシの心は否応な がた郷里とはまったく別世界。加えて、幼時からの暗くて いた郷里とはまったく別世界。加えて、幼時からの暗くて がた郷里とはまったく別世界。加えて、幼時からの暗くて がた郷里とはまったく別世界。加えて、幼時からの暗くて がた郷里とはまったく別世界。加えて、幼時からの暗くて がた郷里とはまったく別世界。加えて、幼時からの暗くて がた郷里とはまったく別世界。加えて、幼時からの暗くて がた郷里とはまったく別世界。加えて、幼時からの暗くて

っぱい走り回った。 っぱい走り回った。 おと横縞模様のジャージに着替えて、広いグランドを目い 部活にはラグビー部を選ぶ。そして、教養部の授業が終わ 出会った友にはスポーツ万能の明るい青年の振りをして、 出会をして、教養部の授業が終わ はは長崎に来た目的―誰も知る人がいない地で、新しい

高校三年生。系列の大学に推薦で入学するためには化学の見つかった。生徒は観光通りの近くにある雀荘の一人娘で、すぐにクラスメートの紹介で家庭教師のアルバイトが

交わしてその仕事を引き受けた。たら三ヵ月もあれば十分ですよ」と、生徒の母親と約束をら上位に高めたいという依頼である。キョシは「化学だっ点数が足りない。秋までの半年で化学の点数を平均以下か

下宿に帰った。 で彼女の店は満杯になり、他の客が割り入る余地はない。 で彼女の店は満杯になり、他の客が割り入る余地はない。 がなの店は満杯になり、他の客が割り入る余地はない。 がは、「結構繁盛しているなぁ」と一人ごちて路面電車で で彼女の店は満杯になり、他の客が割り入る余地はない。 で彼女の店は満杯になり、他の客が割り入る余地はない。

潜り、ぺこりと頭を下げた。カウンターの奥に彼女が一人座っている。キョシは暖簾をの度目かの晩に店を覗いてみると、客の姿はなかった。

「この近くで家庭教師のアルバイトを……。いまはその帰「あら、キョシ君、いらっしゃい。今日は何かあったの?」

分もグラスを取り出して手酌でビールを注ぐ。彼女は紹介込んだ。クミコは付け出しの小皿をカウンターに並べ、自「はい」と答え、キヨシは乾いた喉に冷えたビールを流し「バイトね、それはよかった。飲み物はビールかな?」

とを話した。ヨシは問われるままに、長崎での暮らしが順調で楽しいこりた下宿での暮らしぶりや大学での様子を訊いてくる。キ

サのことを話し出した。 やの素碗を何杯か飲み干すうちに、彼女は饒舌になり、ヒデったある秋の夜に、「今夜はもう客も来ないだろうから、少し飲もうかな」と言って、湯飲み茶碗に清酒を注ぐ。そ少し飲もうかな」と言って、湯飲み茶碗に清酒を注ぐ。そのような機会が月に一度か二度あり、二人は長く付き

宝物なのだということ……。
宝物なのだということ……。
される頼もしい男であったこと。仕事がよくできて、多くの人に信頼され慕われ、次から次へと大きな仕事をやり遂がたこと。そして、この長崎の地で手掛けた雲仙公園の設けたこと。そして、この長崎の地で手掛けた雲仙公園の設けたこと。
は事がよくできて、多く

どつった。の幸せであった日々に戻ったかのように穏やかな表情にの幸せであった日々に戻ったかのように穏やかな表情にヒデサの話をしているときの彼女は夢見心地で、かつて

った。

彼女の妹に聞いても行先は分からず、まったく手掛かりもそのクミコが翌年の初夏に、忽然と姿を消してしまった。

じめ料を要求してくると、その都度きっぱりと断り追いないと言う。彼女は気の強い女性で、時折やくざ者がみか

っていた。「私はね、そんな。輩の言うことは絶対に聞かなっていた。「私はね、そんな。輩の言うことは絶対に聞かなをオープンしていた。四人掛けのテーブルが幾つも並び、をオープンしていた。四人掛けのテーブルが幾つも並び、をオープンしていた。四人掛けのテーブルが幾つも並び、をが二〇人以上も入れる飲食店である。開店したばかりのをが二人以上も入れる飲食店である。開店したばかりのをが二人以上も入れる飲食店である。開店したばかりのをが二人以上も入れる飲食店である。開店したばかりのをが二人以上も入れる飲食店である。開店したばかりのをが上げた。「私はね、そんな。輩の言うことは絶対に聞かなっていた。「私はね、そんな。輩の言うことは絶対に聞かなっていた。「私はね、そんな。輩の言うことは絶対に聞かなっていた。「私はね、そんな。」

よいが……と心配したが、学生の身では何もなす術がなかキヨシは、彼女が不幸な事件に巻き込まれていなければ

〈次号に続く〉

[編集後記]

行する運びとなった。創刊号以来、年に二回の発行を堅持してきたが く散ってしまった。しかし、文芸「草の丘」は第十三号を予定通り発 毎回、会員から力作が寄せられることが嬉しい。 ■この秋は急な寒波襲来で、楓や銀杏の葉も鮮やかに色づくこともな

さらに明るく前向きに生きようとする姿がよく表れている ■今回は詩とエッセイ、短編に連載小説の構成で、合わせて七作品。 冒頭の中川とらの詩は、長いあいだ苦楽を積み重ねてきた作者が

がら、文体やリズムが乱れない作者の文章力にも感心させられる。 人公が、障害にもめげず快活に生きる姿が秀逸。フルタイムで働きな 唐瀬 中川とらの「そよのバアバの空中サロン」も連載四回目になるが、 光の「ラン博士の館」は今回で完結したが、性同一性障害の主

短編であるが、読者をひきつけるストーリーの組み立てがよい。 畑中康郎の「未熟の代償」は、青春によくありがちな過ちを描いた 重要な場面については、リアリティな表現が欲しいところ。

毎回登場人物が入れ替わり、オムニバス風にうまく仕上がってきた。

では何とも言えないが、後編の仕上がりに期待したい。 香取 いんば華子の「この前・この間 淳の「宿場町と共に消ゆ(第二回)」は、『ヒデサ』の短い生涯 (前編)」は久々の小説。出だしだけ

> 第二次世界大戦の動乱の中を生き抜いた人の壮絶な人生が偲ばれる。 乏しい資料を基に書いている。連載途中であるが、関東大震災、

評論等を創っている方は是非、左記までご連絡を! ■本会では、意欲的な新人を募集している。小説に限らず、詩や随筆 香取 記

【会員と連絡先】

いんば 華子 bach.goldberg-variationen@hotmail.com

唐瀬 光 effect_fact_mouth_karase_4118@yahoo.co.jp

中川 とら nakagawatoral@gmail.com

畑中 康郎 ktakasug@am.em-net.ne.jp

香取 淳 katorijun27@gmail.com

高橋より(イラスト)

junko328p@softbank.ne.jp

草の丘 第十一号

行 二〇一七年十二月二三日

発

編集兼発行人 印旛文学の会 香取 淳

連絡先メール katorijun27@gmail.com

U

RL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp